911.3

叫をおもひ再び起へき
時なきやと筆を擱す

小書軒拉識

凡例

一 古集よりこゝに来るまで人の目にかゝるもの
あるたび出し三聖社賛燈の城社五郎門
社牧早行社類皆ちり

一 一句社誤り来るも右之同一夫をや
新年古き家を画之元る玄野外初春
そゝぬ谷の松皆ちり

一 古注といへどもおのゝ改補す野坡
ら影畧互顕支考ら扇引さくれひ

一 先考 府君 諱は[illegible]、字は[illegible]、[illegible]の人なり。

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

後俳何九識

芭蕉翁句解參考

月院社仲丸著

春の部

犬と猿も社中よりの秩、閏の年
愚考明暦三年の作なり申酉戌の酉を一つ
犬と猿の中もよかれと祈るなり此句より
前記作を守りそだちも負徳の遺失法と七俳
仙武み五哲あり号を七俳のうち李吟翁の
門と入まつり俳諧を修りなりしとなり号
時表徳宗房と名のる歳二四才まで
筆まおよそ古ろなや我の松かざり

一書ニ云古今物の名ハ年いさゝあり時ハ月ニ
日ハ詳めず心ハ世我を人ニ云ふえて
一説心ハ世我ハ松ハ筆ニ包むの心おもふとそ

庭訓往来俳の文庫ニ明れ妻
一書ニ云まつの文庫よりまねを云出すを誤
而とせり延宝中ハ作なり
嵐雪の俳号ハ雪中の梅ニ出ル
発ニ秤を
誰やらんの俳ニ仙ハ我の妻
一書ニ云幻平業平ニとの矢服我かざりたる
ニ仙ハ雪ふとして二義あり
一書ニ云白氏文集ニ庵の廷陵妾ニ客を称矣せし

詩あり。瑞正容貌若陽春とあるより出たる句
なり。句のさいへん旦の暖孔子を見しく人物の盛
なれバ一切風情も又延陵季子の如くと一物として
俳諧一道の活法と云楽天の詩あり。和尚の
俳諭も記すべし。翁の句是のごとく限りなき
処をかくのごとくあるを脱化といふ。
ものあり
愚考是ハ孔門の子路を借り説苑曰子路盛
服而見孔子孔子曰由是褒々者何也今若衣
服甚盛顔色充盈天下誰肯加若者哉子路
走而出改服而入蓋自如也孔子曰由記之吾語
若驕於言者華也驕於行者伐也句の意ハ

嵐雪の心をうけて師衣を拂ふ人我と共せんと
つきし仕立おくるゝ我意休る時をまち志を
失ふさまざまのごとく共用ありもなき心まで
あるべきされバ子路を使ふ如く心まで
らすとあり子路ハ家貧くして米を負ふて
老母を仕ふる者の為人のなき衣服をかさる
を対ふる意なりとあり我ハ心よき意なりと
いへども嵐雪とハ共せん人のあれバこそハかり
との意なり託宣ハ天くだりやう意也
くだりと

京ちの記ハ一年を誌して
誰人の筆共ハ居中の人乃妻

一書ニ当家求の孫最古ともいふ

一書ニ云ふ行岡山の達磨と云ふ推古天皇二十一年十二月朔日聖徳太子行岡山を通ふ時ニ達磨飢人とあり貌を醜股襤褸にして臥すに依て服を脱ぎ与ふ翌日使ひを遣して見ニ太子和歌を作りて与ふ

しなてるや行岡山の飢人にかるゝや誰れ親なきや飢人

おやなしに成ぬらめ哀れ

太子の御名を忘れ

孝経堂夜話ニ曰ふ孝経ニ曰ふ孝ハ徳の本なり孝経堂ニて云ふ行岡山の飢人ハ十二月ニ太子対面有しハ実ニ是ハ橋の元祖ニ

食ニ与ふ

つゝのお話ニハ此の説ハ変ニ

あるといへども

思考孫最ハ友ニ

具ニ依達磨ハ醜股襤褸の

ハ

ニ

ニ

ニ

中ニ

ニ

ニ

なむ心なくのいふにくくて又心ふ柱ふ付うと脚の
木の枝ともその許一付くまいと思ふ葉も付
らはつ一のそ人ぶあき社ひをたれく今枝支。
程乃てきを付うとこのや或時人のなふ必へく
見よとて流るを切させ社ハ此侍のふ柱
柱てきは心さいと思ふしも有難く付うかふ使う
ふさものハ人の蝶あてをかのとて行時ふ付へき
かれハ使宮よく付る時を見を給れ但おおハ
延蔦を見あ社てた柱のもれを肩ふかけ付れ
見ないと新一く付ふへられたるし春ふ付う
脚せ延蔦なるの松ます西き時付うむそれを
切させてもふへきとて立一ふ社をう必きんふ

笑て押てとふせ付うふとふ必ふ柱付るとてお
るふもかけ称たちのふなくして止ふうと云
さ社う句の云ないのふる人の世を見かふうかはを
歩行のふおやとき人のきふ脚ふゆかし付れ
蔦笑く居ふ次とあのめまるものへ社来近き
所とまて書あふるハ必宮此人乃俳あるてもう
たのひふ一れ擺集おを熟読してあ所一
俳諧ら意表ふも来ふう千代の要
伊勢の所この要表のてハ七部大猿ふくそく
おめ社を宮ふ略ふ
発句あり芭蕉桃青宿社表
句のふいいの句ふ外ゆれふも芭蕉とあ

まさて深川の菴主ごの今ぶ屋ー
仏合ー中彩ー年 瓢来又弁
一書ニ云深川芭蕉菴ニ来又弁 さこのり盆ろ瓢
あり米らしめ弁ハ門人より補ニとあり瓢の名ハ
瓢重鷺山 自笑称箕山 莫慣酋陽餓
這中 飯顆山 山口素堂
思考共句のみ文字真ー川や年三やもと
おせるあり荘子の五石の瓢を恵子ニろ陳
剛明このみ斗の果ハ実ニへみ弁入の瓢ニ弁ろ
ろ仏今ー と奥ー ろみ 顔子ら一簞食一瓢飲も
ややの労らむや
其引

新石の拍板ニおへふ形又ももあー
恵ろこのろろ工拍子もあー て我よ
ひとりのひさこあり呂左たくろ
ろつけくろ入ろ器ニせむとす
社を丈ろてのりまあらんさま
つろろく酒をもらむとまれを形
又る如あー ある人のいとくく草廬の
いみー ま糧入屋さもの也とよこと
よもれのさろあるこのまやこのて用
ひくく陰士考翁よこ ろくさ社ら
名をはさー むさ大ろさ太よ
志ろ陰ま句皆山をもておろろら

ゆく四山とよぶ中にも飯顆山を名社のすめる地にて李白の
たたずまれの句あり李翰林白
ユかたうく系舟をはくせむとす
かつむすび時に一壺も千金をいふ
まさく箕山もかろしとせむるかな
もれをとうに瓢をかろき我せだ
愚考顔子ハ瓢子ニ恵子ハ荘子ヲ以テ曰
恵子謂荘子曰魏王貽我大瓠之種我樹之成而實
五石以盛水漿其堅不能自挙也剖之以為瓢則
瓠落無所容非不呺然大也吾為其無用掊之
荘子曰夫子固拙於用大矣今子有五石之瓠何
不慮以為大樽而浮乎江湖而憂其瓠落無所
容則夫子猶有蓬之心也
四山とハ箕山を五岳之一とする言さ四十八里余
箕山ハ許由のかくれし山なり
首陽山を伯夷叔斉らおもひて隊死せし山ゝ
飯顆山のるハ七部大鏡猿蓑の注ニ委しくれハ
贅ス、ニ白新あるといへる序のよろしきハ
実ニ此次
年くや猿ニ名せまる狙の面
古注ニ云ニ白表ニ李と書る如又云ニ人
の字ひろれて年くの詞年のよろしめるあり
すやとぞ

一書よ云此句仕損しの句こと許六同呼の上書仕
損しあり又翁若て云毎句有仕損したらむよ
句ともこと又のあるむ下まき仕損しをせんと
云時き一句て眼をひらきしと云
面白き秋のはしめや三井の井花
是老元日き年の始日秋始号を三えとり
吏をこゝのほと覚しまるや
山水の集を枕しても
旅の舞そ遠聚五雑員十五の年
是老古ぎこと「旅ともや木丸原にわ孔をも
名のりそ枕しゆくき旅するその供き
曲水亭

小尻の数のよくさ九年始集
元日ヲ田毎の日ヲ我を立しくれ
一書よ云此句法ほ秋の法此句と又へくく
元日やおもへさひし秋の雪
二季合体の句ゆへこゝをおなく
元日や仏のとあるれと 蓮 橘
是老山家集よ「妻よあるほ橘の枝を仏のと
ほなつけ此もむつ「きか橘の枝をまた
生橘と虚よ仏「まむ句
是業に少さや仕数の初便
続猿蓑注解よ出ゆへよ略ス
宵の年 その名残をしき

なと旧友の来りて酒興しけ
ふよゝ日ゝ盃さして伏しくゝ暇
乏をつゝれゝ

二日ともぬうとせしれゝ冬の春
二日ものてゝよゝの事七部大統ゝ委し
三日閑口歌四日

大津繪の筆はしめを何佛
一書ゝ大津の乙州の新宅ゝくゝ越ゝの句ゝ二日
もるてのゝゝゝ雖ゝ不の扇ゝ折ゝ則句ゝ
ゝゝ四日のるゝゝれを何佛と居ゝゝ滑稽感す
ゝゝ扇ゝり大津繪ゝ岩佐ゝゝ人書ゝゝゝゝゝ
るゝ家ゝのゝゝゝれゝ乃

あるゝゝさの今をちは

敷恵ゝゝくゝきをゝ民や亀電
素蘭ゝ延喜六年日本紀竟宴和歌 得大鵬鶴
天皇 左大臣従二位兼左衛門大将藤原朝臣
時平 列賀度能児乃保利天美礼波安女能
之多与母尓計不利豆伊万曽度美奴留ゝ
のゝくゝあるを彩古今集賀部ゝ注閑
知ゆるゝれゝ国ゝ先ゝを出後ゝゝ
たゝ記中に彩ゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゝ乃かゝともゝさゝひゝゝ和歌朗
詠集註刺史ゝるゝや此ゝ日本紀等
を勘ゝれを仁徳天皇の四年二月ゝ楼ゝ

天皇在位八十七年正月十六日崩ス寿百十歳
百舌鳥耳尊ト葬ル平野大明神トヤラ此帝ノ
子日〳〵ニ於〳〵ゆうむ友をち
恵考十餘録曰正月子日登岳遠望四方ニ得
陰陽静気一則除憂悩ト四方ヲ望ムト云
ヨリ起ツテ子ノ日七草ヲ
詠ル翁ニ
一書云拾ふの名ノ云ニコムニヤク
又迷ヒ
ヤくまつ〳〵ゑ茅つむをく此ヲ
ゑ
おゝかみの白髪生ちよくゝ味ふをゝ
おゝかみの茎先ち迷ひてゑ茅ち

一書ニあゝかものたかふゝと枕詞ニゝゝ
葬つむゝ
浪化云伊勢物語「春日野ゝ
若菜つみつゝ
四方ふうつせ秋もまとろもろが
古畑や葬つみゆく男ども
ゝゑ久ハ延宝中の仮名次ヲ負字三年の
白まて生泥のちゝゝ
よく見ル所ゝ秋ゝ
浪化云古今集
秋ゝみの芝生かくきのゑゝ

一とせ二度つまるゝ事秋のふ
古注云今おもふさまおよそ二つ四句有
すてゝと一と物語一つゝと云
思考茂系風にたゝたる氏なりけり学一とせ
二度ひとの文へきまかりの一物語て学ハ
乞ふさゝるなるもあれと秋ハ一年二度
くとなり
橙や伊勢乃白子の店さゝし
蓬莱の島と愛のさまゝ千かゝひきるゝ及
ぬ一云なり
風麦亭
真立てまゝ九日の野山かな

思考前楚歳時記曰一日為二日狗三日猪四日羊
五日牛六日馬の日八人日ゝ六日まて六畜の日とい
七日を人日八日を穀の日やうゝ九日のまもれた
山野れ宝もいまゝ調ふ氏となり
服所へゆく人て
粢の祭文ゝ末よ清田の実
思考埤雅曰獺取鯉於水斎四方陳之進而弗食也世
謂之祭魚蓋自祭其先ゝ
木ゝ枯ゝ杉ゝやゝへぬゝ実の草
学九の大全ゝ木ゝのなさけとかゝをつけゝ
思考木ゝのなさけとハ一条兼良木ゝの引
ゝてゝ枝ゝ雪をゝ枝いさかひをあれなさけ

よてもよもあらし
雪ふるよりあけぼのの猶佳きかな
江戸へおもむきをくだりてとなみ浜白
とすくやのなかう山ほの牡蠣もまだ
雪簡よりかきもてくるみ出候もの
天神社賛
大威徳あり〳〵梅のこね
此梅よ半も初音とつつ屋し
梅咲やさてもおちく本来を事
古郷の梅や彩陰のこ年城
右四句も延宝天和の作なり此の年も牧童

の作ども有めへ〳〵次のおもて筑くん本来を事ハ
終る跋の名目といふ或ハ来を事を学ぶと云
又比工よかる哥ことばの新法説よりして
定えかゝ〳〵をあしの作接よふ屋し
次王仁のさくやさのをそふもとあをハ二年
さ〳〵ゆくのちう

陰中の或庵にて
白ちよ来る梅さへ余仏の垣根か
負字え年の作なり浪化云西上人ひとりぬ
そよまくのうつ香を垣根の梅よおひく
ろ
一書よ老就ら限定あり

一説淺草寺の内梅園院の境内より梅の木数株有てりれて中ほより梅園院と改させ給ふとぞ
思考寿よたる人も多きまて剃さく梅の白ひも余江の垣根よりかおるとく又王荊公の訪高士不遇題其壁曰墻角数枝梅凌寒特開地遠知不是雪為有暗香来

梅白く一年一度の小醍ゝ井

一書よ云小醍ゝ井を江列醍ゝ井の傍よりなる浄蔵ゟ所加おく一て出せ一多く梅ゟく清くして年一度とゝよ不ゝ毒をふくめり井のゟ形変よゟ出ゝとゝ乃ゆるゝ初夏ゟ小醍ゝ井とゝを合せゟるぬゝ

秋風ゟ吟流の滝を訪ふ

梅白く一ま多の下や跡残ゟ秋

貞享二三井林風をたつ和てく

一書よ云流門の流よりゟる千載集ゟ

芦田なよのゟてかよへる宿なまとあゝ心に人ゟ乃えぬくゝ

一書よ林和靖の住をとゝみへて

一書よ云筆談よ曰林逋隠居孤山常蓄両鶴縦則飛入雲宵盤旋久復入籠中逋常泛小艇旋西湖諸寺有客至童子出應明延客両籠衆鶴良久逋帰常以鶴飛為験以友ゟをふまへく洛の秋風我林和靖よりそゝ行る国志く今日秋風

自分は此の事の為に

元年山里の句を
一書よこせ吹徳院に製「山ほとの杉端よりかさ
みをよそおふ香をも」此天もやさしく家の
主人もうつくしく通ひ合ふ時作の扱ひな
ども次を
一書よこせ初桜をおりて折ふしその枝
折て桜よおもおもたるえく後の句を
思ふ阿古久多を貫之の童名をなれ久多と
云ふ貫之もいつきを童名をむすひ
伊賀の右近ての吟なれとく貫之初瀬て
学問一部へ上つて朝臣の功いみ〳〵く後ハ任
参議ハ昇進ハ貫之後初瀬へ詣てられ

一に初かの時折おり折ハ枝を人折へ
くえせられく貫之をお庇「人をいはゝ心をも
らすなにをかたきむすひみ香よ匂ひる梅も
なの古久多の心をもくみもむかしをしのひま
てかく吟して中年の昔を述懐の意なり

卓袋亭

日待や梅かさけ折小山伏
あふ山ふしの
ま深かむさゝはへ梅の盛かな

えらく年世の仏なり尺閑の通ふまて折ふ
子細尺ふ序涼袋評あり略す
えなきをうつくしみ新なるみ梅ぶ

伊賀の山中に雲冊といふ
ものあり土産として
蕈を漬て出すあり
其香にて

香に匂へ雲冊坂の梅の雪

北越庁町の東にて土を切てホーて蕈を製
後の土も平生の土よりかをるゆゑ

梅咲てあるじ二人の庵かな

門人伝ふみちをくへ
をこるの俳諧

立つるなよ蕈汁中なる梅の雪

書よ云新古今なかゑつるをむうに

ものゝ梅よ来を立つゝ
一書よ波来よ文字を忘つゝと記し出す
除川右杉風和哥の真蹟又ゝとゝく
和書なり生世よ記し動ゝるのゝ
波をゝかゝ

思考氏句も古て伊賀にて元禄元年の句
俊令実集ゝりして実朝の撓を拉歴せる
古ゝのゝを立つるふゝ帰りまゝとホー
ゝ吟ゝすゝ書ゝつゝゝもゝ蕈の甲
ゝる梅のゝ気にてゝる一句ゝ尺兵衛ゝも
返別のゝ書ゝ裸句にてゝ成就せゝ
る句ゝゝ波のゝてゝも吟ゝのゝなり

世中を楼樓必へ——

樓のむ——樓の柳の木ゐ

細代民部の息よあって

柳の木ゐなやうゐ木や柳ゐ

七部大後よ委へ——

子供等よ柳のこゼ半の歌

代ゐゐ牧幸の供なるへ——

防川亭よて

香をよくる柳よ女ゐる新話で

笠女葉——ここ

暖笑ゐの愛七のゆう——小の柳

笠女ゐ住翁の人国西惟仲の妻

待簾ゐ隙の柳をおろ——

杵柳の歌

洗濯の折となんなふものゐ上

つゐゐにめてさせゐひ月空夜

枝葉の笠物よゐ枝ゐ抜いつ

まの山より生ゐまゐのゐの足

ゐ柳この砧のかゐみ歌ゐや

むの——ゐ樓樓ゐゐ今ゐ笠

入とゐまゐ人堂よゐ奥ゐ

笠を隊といへり人すしかく

めゐ——ゐるまゐ居て踏ゐ——ゐ

俗ゐよ有て恨むへの——ゐ

よて小の梅とを仮一玉へて
乙州梅別
梅若葉まりこの宿のころ汁
七部大統之妻一
美もやしまえその二月と梅
かそへまぬ屋敷の梅柳
姫の句を真青一到價千金酒一日此の月の字
又いとむ方たち一次の句と別之論をとく
とも方まよ「梅柳すきくく」之仮住の
うち之花ひ一さく銭ともとろまの仲もあ
うもを
梅柳さてそろ流うな女子ぬ

共白古調なれば吹之出人座さを梅柳の序
ふのしられて宝永古詩五七言 碧州已
満地 柳与梅争春 謝公自有東山妓 金屋
笑坐如花人 たきらふおもひ合せて興あり笑
申さて笑元ぬと出せるを雅然へ一之念
を想之一る詩ふのこと おの一かう叶よを風雅
の情秘てたり笑笑の句を詩の意を一句し
ぬられて云話しられ吸おやこてそ笑ぬ
やうに只ゆよて梅美元女ぬと梅をて元
柳を娘おをいよ字よて詩の形容をおせさる
ぬ〳〵ぬしなり
人しも又ぬ美申続けう〳〵の梅

続猿蓑注解之巻

梅の香にのっと日の出る山路かな　　凡兆

一周忌の文梅九ツ許へ一年ハ
爰のたとへ一ツ一ツさゝぬ
なりさのにほとおしひやる
　のこゝろ

梅の香とむつかしき一字あるゆへ
一書ニハ梅の香をなつかしきゝてるさきのみゝ
のやうに記ひしかとも句ニ人さたなくてもの
當りよき一字をさゝ引いさ支論も人ゝ誤のかしし
愚考ニハ是位のゆへを指南ゟ及ぢ尺とも志れ
さる故ニ凡句ゟつきてあゝゆる古俳古家

の梅ゟ昔の意をたつぬる工梅の香工昔とよみ
つけたる歌俳一首ゟ限ゟ新古今工梅の香
おむの一をとゝめ妻の旧さゝへぬかけゝ
神祇ゝうつもる此歌をさゝて一句ゟ云活ゝる
もの也此歌ゟあゝて此句を解さむるハ
蠧海の粉活なる歟ニ

去来ぬもとゝへ六人の友なと
いひ出ゝとゝる

芭蕉翁のさゝこゝ梅のそ
此句ゟこゝ迄の訓くせあゝくおかくの人ゝ芭蕉
此さゝ味ゝおゝゝとよろゝ梅のそゝを彼ゝて
妻恋の鹿ゟへとゝる実ゝたる論なり

あちらや面しさうな柳髪
学ぶ我魂と称ふるを嬌柳

一書に荘子秋物論曰昔者荘周夢為胡蝶栩々然胡蝶也自ら喩きかよへるなり栩の字の時るうめく条たれもる白日と仇去るを栩栩の字よりそおこよふ座まを学ると時きるを彼故事よりて故事よつのもろもろといふ俗語の荘子なり

一書に云温庭筠詩に曰不比禁中人柳条朝剪得三眠

一注に云漢苑有柳如人形号曰人柳一日三起三眠夫木集に「三ようひとえ」と詠ぜり外れも柳ひるたく枝の仏なるらむ又柳に学るの名を白氏文集に云緑絲条弱宜勝柳風来

そく書なくをきるれ亡人のるをしめれも
凍ーとらに筆理に必定せ了笑そく書なくた
おーとうに方に利あてさ此たは書をまて
大切く既に其角ら学の才を遂さ法るおもか
とうに句を来てても表根にても才を遂さま
とは初音の根にのるれと語もく筆ー会へて
おゆるそたもあてなむやに句にそ去ら
雑蠶黄鳥止于丘隅とそそ書を添て見る時も
鶯ともるところなーは一句の気をせんて
鶯すまるまき野の至極なり
梅の香にのつと日の出る山路か
七部大淀に委しくれた略ス

別有情一日三眠　何大愧蘇家小女共知名　此詩よく
叶へりとも又まをぬむよ似もう雪を魂よ
したるも俳家の沙汰と
思考後攀来る「うく飛すの糸ふるてふも
柳吹なびくをよ其山風吹ふの之まむう
玉柳嬌柳いつまも美なりを玉を魂よ恨し
たくやの柳くる仮之又古詩よ鶯眠柳借盞
柔の枝よりおちきる柳この
猿觜よ對し
もろくのさる柳よ任すへく
古人の門人なれもも実の実見をう
杜園をたく風

笠よ結ひ柳結る旅出かな
送別よ柳をわきるつなを私僕の例ふ
き之おもくこのなを
一　なれもものふさなる柳のまひむ
なまものよ柳のさなるをひむ
柳のさなる。さなる柳の論まちくと許六を
さなる場と宇陀法師よ出さなる柳とも
も首切よ成とき、
愚もさなる柳よ組せむ
柳坊歌書の賛
なる柳の家こうむすふ　俳の那
拿よ挿わけ見きう　柳坊

今は多くの人を傘てをしつけ又さることも忙きふ
いくあ侍ま
八九月をて雨ふる柳の形
さ〜矣を炭俵より入次を続猿蓑より変〜りれ
も略ス
猫乃恋竈の煤汁する通ひろ
田家
麦飯やつる〜恋の猫も妻
さ〜めを延宝元年七次を元禄四の年私作
さ〜も
猫も恋やむ時閨の朧月
浪化公云「我もすこ〜おおもよけもあけ

〜て国れひて此へつ社なまうるの乳牧
猫の恋ま〜を特したるなを
白魚や一価あるそうるなを
延宝中の仇句そるを句作あさやを
藻よすこく白魚もそを活き
負享元年の冬句ていまき意ふあ〜ス
親子社契
白魚や黒き眼をおく仏社祖
愚考を元共事迹未詳元和元年を以ひる
俳諧をすく〜てあ夕元つ故ふ人より呼て
親ま〜云我名ふてを一休和上の魚をくひて悔る
訪なり一答を一心ふ物あ〜ふ〜て助るまう

ことのやさしくて白魚の法の細きまでもれて
来の風をひゞくべし
恵老三籟集に岩阪養禅師値會昌沙汰
逐住郭州湖畔逼汲婆子接入両岸各擬一叔有
過渡者叔師乃棄棹迎之因僧辞入嶺師云
雪峯若向二關岳一応近日如何但向伊在鄂陽湖
畔將三文錢一買得拗波子毎日拗蝦撓蜆過時
僧拳前話雪峯云窮鬼子得恁麼快活云
是親子和尚亦有分
その枕の森鴎てすさまじ
くれよ後の方おそろ
しきの白魚きらきらと一すじ

笈日記にも又文字雪蓑一を出せりいかゞの
名再案なりと云
一説に白魚ふるさと千ヨツトと訓むべし
あるを打ちたゝき魚かくれ家有のまに
一ツスムと吟ずべきを可なるむ

留別

航れるの白魚おどるお祝かな
一書に云奏の細魚を忘ひ立ち留るとて
才を白魚に老ひ比一人を航のそまに
たとふ時に年四十六元禄二年の冬
季下芭蕉をおくる
芭蕉植うる人まつむ萩の二葉かな

此時深川の菴を芭蕉庵と号ス左右天和年中ノ事

就尚舎ノ有職ナル人ナル事

扨ノ名ヲ失フ国ノ荻ノ葉ガ一書ニ云ク南子ニ入ル其国者従其俗入其家者避其諱一書ニ曲礼ニ入境而問禁入国而問俗ノ意考ガヘ似テ書遣ヘリ有職ノ名ヲ変ク物ヲ知ル人ナルニ物ノ名ヲ失ヒシヨリ歌ノ芦モ伊勢ノ後荻モ扨ノ如ク也

たゞ草ノ名ヲ出ス名異名ヲ限ラズ雁ガネ一名玉章ト云ヒ雁ノ書ヲ十六字ヨシアシヲ計ヲ云ヒ雁ノ字ヲ以テ書ヲ又世俗ノ文字ノ書方等ノ書方アリ又世俗ノ文字ノ書方蘘荷 蔦芳 鼓花名蓬蘽 等ノ名アリ扨鼓芦ニ限ラズ扨ノ名ヨリ文字ヲ引カヘタル異名ノ一二ヲ出ス杜鵑三百余名 馬百八十余名 菊百七十余名 梅百五十余名 犬二百十余名 鶏七十余名 蟬六十余名 苧麻 猿 羊 牛 鼠 鳩 鶏 狗 等ノ名 雑子 蚯蚓 蛇 蜘蛛 百足 蜜蜂 蜻蛉 蚕 又

草木之 柳 梨 栗 桃 李 杜若 鳥瓜
就膳 蓬 茘枝 棗 茸 苔 蓼 蘭 菱
桔梗 苔菜 萱草 蕙 菫 竹 篠のたぐひ
平或は三十 三十の吳名あり 其余の物名
いくらにても四ツ又十 十又の書方牧拳すべし
いとまあらば 予が秦吳名鑒を見ておき
らむ事

甲州郡内より出て

勢ひある山アも妻の隈川魚

茅舍社画賛

荏柄へ芳紫やさしや彼岸桜
芙蓉くさや狼煙よ遠きこの寂

萱庵さまとありて社 蔦屋橋
千里の許より
はる苔汁乞を陸奥せんと浅茅桃
おとろへや歯よ脊てしはぜの霜
一書に云ふ賀上人の辞世「三ツ又や
そしおもてを花壱の彼岸だけの骨よあひて
うかな此歌の沖月を沖苔の秋よ五七
ます 漱石枕流の骨随て くだうき乃
一章 なり
更考三ツ又ともいふ歯之枝なりを云
うるさ三ツやつむとも老かまりたるをいふ
老櫛

坂よりそれ北の雲をせて
古注に云山家集に車さなるものをあらびる
るをいのそとそしりられも略をほして仕るく
とやりるを作るく「松なくも坂をくさ
しくかりに屋をおよ給よりそれもたりなる
なお歌をおなじ生きあをうるもかまうまこ
うかきも着語の二字の叶よといふを先
師も生きも歌をうむよりそのうをられ
乃至も法文叶よと一段すりよて仕しまも
あ考新古今集不教生戒の歌よりかひ
れこの歌よそむいさそくせくもつかひな
るをもあよ さ料を一段すり上すも

業く此歌よりそむへそをたつ和次
て生を流て新笑上手料夫智度論曰
諸善中不教生戒為第一
松のふ答歌よまる 次なこの手
注句を巻収よて松谷の猶吟おく 故義仲寺
手施行生浮まる此猶吟とりまる今仕
仕こと有考
挽るまめて半まる松のよとをな
菱堂橋木子よて
土をおれ松ふや木ほま屋仕句を
此句探意を花の新よ出よる非方よと松のふの
句く味ふ屋

賞玩梅の梅ふくみ
古澗の冷なる清輔体草紙と白氏の人ハ
とゝむ屋きをのとよみふくめる梅のはなのもの
よよ梟あまつをひきるめ〳〵とうたゝされ此句
梅のと氏の人句仮〳〵へきを梅の梅ふくみの
梅とをとゝ〳〵句仮をとよを別句の上〳〵
又せるとなりてよをその肝要よく〳〵心を
せ更く味〳〵へき事ふくみそ

百歳の宅ふくみ

梅花笠 梅〳〵たゝ梅ふくみ
更秀秘蔵抄よ 梅の梅花笠ぬひ梅花
まつひ〳〵たるまゝらおとるとゝ

此ふくみ梅の心花ふくみ
胡蝶云梅ふくみおもきふくみ〳〵ふくみ
らひふくみるゝ梅花梅ふくみ梅の花笠
の梅まても梅ふくみ句ふくみ
或人云く仏ふくみの笠ぬふくみ梅ふくみえさへ花
かゝりを又ふくみて不仮ふくみ
更考ふくみ此句ふくみ用ふくみの梅ふくみ
梅ふくみするふくみのふくみ笠ぬひ〳〵たる不
論ふくみ考之〳〵

梅や柳ふくみ梅の
愚考劉禹錫之詩よ梅到三重楊不惜声梅ふくみ
柳ふくみ〳〵ふくみ和漢ふくみ通用ふくみ我中古より

梅と雪とふたかさねる折ふしを
その年とさだめてうたよめもちふ
うぐひすやもちふ
消息集よりの抜句を日ごろ文のおこたりの
うた、
一書云なほ六句を水琴とうたひ雪を楽しむる
ときは句よりて人しれずいひのこしやう曲とかけ
合を大変にすべしとかや六義といへども
俳諧よりの篇立をすべし歌曲流と心得べし
等もて記すもちふ兼ずる曲もお梅の先
流より句をば時雨と詠むかけあをしたる
うへにて

季吟勧進
和歌は詠よりや 公雪の八重葎
宗良王
書きるや名もなき歌山の朝露
なべもる天和年中の俳諧なる句法の
和歌をこひよせるを海内の貴賤二条の白
石西行のたぐひもち
大日枝やしば引捨し一束
一書に山門の玄旨一休禅師よりの句を書てと
新ひろめたる紙を長くつゞきて東坡なども
引きてくる處山よりも一筆にてしの字を引
まひしとなり

思考語らひて松壽丸は壽丸人語むことも
なくとも為縁のなくともと心ありて
あやまちて既よくして大空のおくてかくやうを
又かきよすくて大空のおくてかくやうを
こゝろやりおくりおくりて俗論俗よりやの
変もおくりおくりて俗論俗よりやの
変もおくりおくりて俗論俗よりやの

閑心相朝

をくさまきの心相さゝわ若葉の下
心相も美濃とをいわや空 相
ち先を延宝の吟ち若葉の巻を大部
まおきを上下つをつを延而ちまひりを
峡石ち吟かち一まちかきくすゝ

天和中の吟之

高野山にて

父母の志ちりこと一緒なの子

七部大後ろくちち

肥吟ことさみを心一緒なの子

一まち肥ち雑ちをとむと老ち方ことかく
をよきほちこメつけさせて信かちをお時ち
肥ちすくよくちくれを却て雑なの吟ち
とみど

所ち花吟ち中の松子やまーの子

古信ち云所ち花の時つけち中ち雑のおし
時入りこまち名呂ち味をとむとろく

石川北麓生の舎弟山店子
我つま迄をなつさえむと
する哥の奴凌させて保川を
おまふ兒を書泥坊在社
芥うやあむとき代の
ひも今ゆくよおほゆ

我為の詩補のまゝに芳社奴
天和年中の吟
笈寺納

かけてくもらぬ家も妻の雨
一書よ此句を巻収まして吟はれ元の号仙の額
面百年の今まで作よ主くうとうと

思考今堂集於号「芳社奴」
と如ひゝむくゝ出家も神も
もの侍もえゆ

赤坂の居まて

ふ性さやかき記さ訳し妻の雨
一書りの雨そ家の父母といへた妻の万あうみて
しまかさちをみとるの母も抱れる形
ふうつしての吟をを

吉野当信水

妻雨の末下よつくよ年ゆ
たるをを峰の巣つくよ屋根の編
一書よ新古今つくくと妻のををのをひし

きは志の雪てふ新の字ふ秋
　春雨や枕くつるゝ人もなし
公の来主ることあるまゝおる氏なりこのだ
ち論なりけり
　たゞふさ色やまをのさゝ氏そのゝ
　春雨や葉ゝ氏ゝ氏川　梓
五考春雨ふ日雨ふ色ふ色の終ふやすきも
なり秋ともふ色を以て春雨　ゝ月雨とおのつ
ゝゝつるやふに仮るへゝとふくされたふの
ゝ月ふ心をつけてふへゝゝ月雨ふ終ふへきゝ
ふ色ふ一つもなゝゝ秋の雨ふまゝふ格ふ淋ゝみ
を仮するゝれた自然とふ雨ふもゝ月雨

ふふ社めものなを
杜芝やまふ坊ふその一二　す
阿波の在ふ新大仏とゝ
あるふ此ふまた南都東大寺
の聖俊ふ上人の旧跡なり旧ふ
ふ七ふ五なと一人二人をさ
そひふゝして彼地ふふふ
仁王門建物の跡ふ杜たるま
の庭ふかくまて松ものいたゝを
両む僧ふこの事華のふゝて
といひりむもこのふりゝまふ
ゝゝむたゝ名ふ入ふる蓮華

凡三
室の八隅をかこみ中に流あり清水湧出
て燈を照すをまた補助の燈火をそへ
まつる 燈油も彼岸より供へ
陽炎や柴垣のまゆ若
大徳大徳
雪の松や堂をまもりて侘る
多賀の宮社別当
二月吉日是橘の利雪
医門に入を賀す
初午や狐の判一天窓の
愛想

推け半ば二月中旬初午
延寶七年の事なり我二月中旬献花と云
古流の伴もあるを

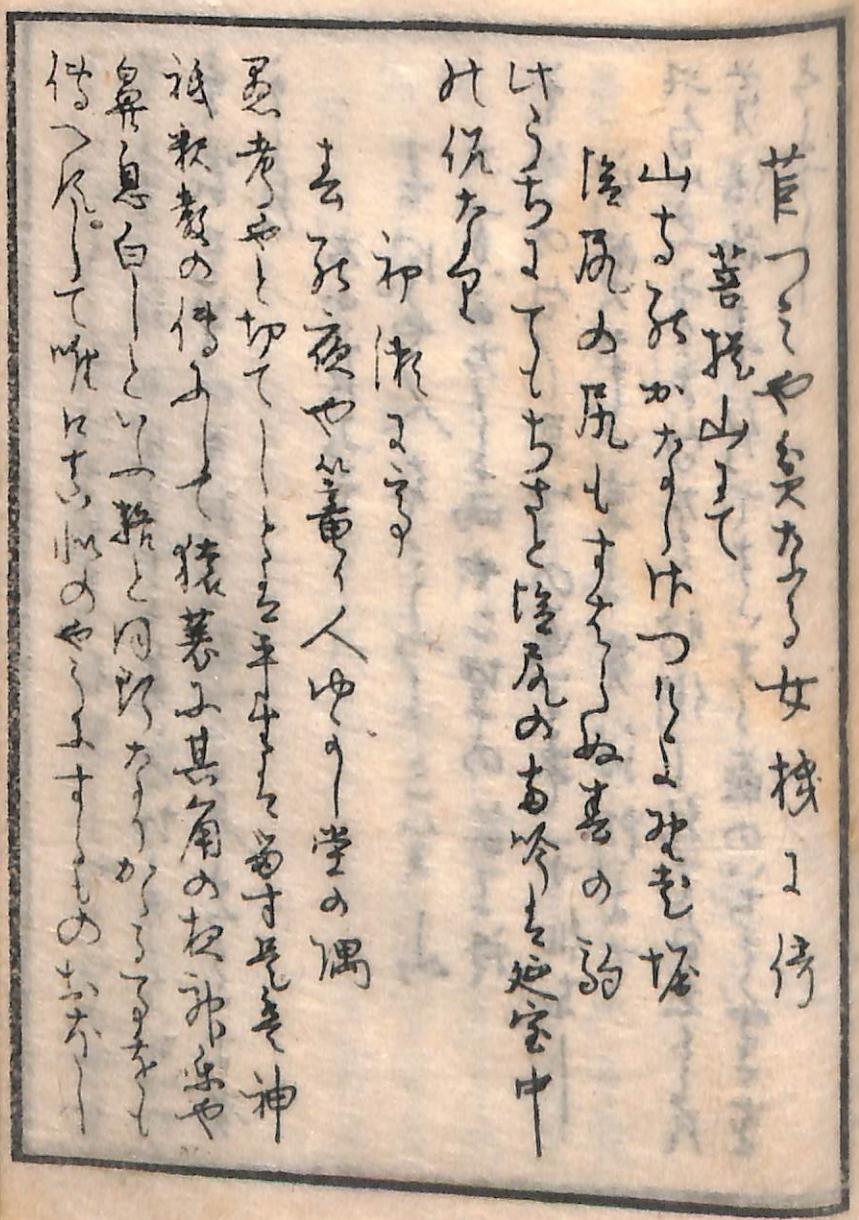
二月堂通夜

あるやさもその僧の香のする
一書に云白みそや氷の僧ばかりにてその部
に入事なり二月堂は笈をとゞめ泊
書よかたよし氏神法会二月初より七日
あり氏日堂前の石井より若狭の遠敷大明神
より観世音へ献ずるよし水湧出る則祝ふ
て霊水を汲氏名を二月堂の水をとゝ
伊勢ふり

神垣やおもひもかけず涅槃像
一書よ云今年春より一神こうさのおうさとなく
しくたすけさおとひもかけぬ福のきうな
涅槃会や数多会する殊勝のき
號猿の解よ春一
二月七日神路山をさる連
歌の同をさるひ婚賀
社信誠かたうよ
裡よさうさ祝さうさの巻ぜ
一書よ曰此句婚賀の信を悲むといへる河書有
此上人及心の忌ひ給く伊勢大神宮よ参詣有
て名利を捨よとの示現を蒙ひか神

衣皆を食とに脱くまて赤裸よくて向一
西ひ今と撰集抄よ記さ許たく咋於発よさ
を名利かるやさる二月の暮ぜこさ修を
さるへる此句の深志さるへるみと
遠考西行の事よ世よ知れさる友
さる婚賀を橘恒平の子恵大坊のまて
寛弘元年八月七日寂す
遠考寛物集 日本大師明通記等よ修賀
上人と書
一名所八体外
貝おの風のまや私今の浦
天和年中の吟なる貝おの風を二月二十日

若後経彼の浦下より風をいよ天王寺の伝
華令ま竜宮の乙姫様よりとけ令るとなる
むけ貝を拾ひて聖灵令るの造巻かゝに
なて太子ぜ灵巻ま侍ふとまう二月十九日
天王寺の公人六时堂の前にて日私ちといよ事を
の壱の四隅ま立て舞楽を奏尺とまてその
見ぜ形様のふま小ふとまふとけ彼住吉の浦を
吹なくまてし私令の浦へおるしあふとの白
えなる
捨しのま聖ぜ接待や山伏巻



花つこや実なる女様ま侍
菩提山まて
山まえかなりけつりふみも恰
住屋ぬ屋しますそふぬ者の詞
けうちまてもちまと住屋の者吟を延宝中
ぜ伏なる
初供まする
去ぬ夜や竜宮人ゆり堂の隅
悪者ぜと切てしまる手牛まを当すぜを神
祇歌巻の作るまて猿巻ま甚角の拍子巻や
鼻息白しといふ一節と同時なりかゝてまを
作尺まて吹ぜ伏ぬ小のやうまするものおかし

なけかしく死ぬる名残――やしてよやそ
苦土ちく次名残さやそ急ぬるたち初心の
幸紫式部の美形を高へうみつるす屋
うく尺

李白

春風や人をうつす三笠山

さてのなる雨や二望の茶る将
そ等の句し見守の通そ子細あ――
秋蘭まる芽法柳まて
此句等へみくまる特例一称を句を尺尺
芽法柳まて行てまる蘭のいちくやきを
まく――

雅ほうて候たく茶常蘭
歴つちおすする木るの蘭せ
盃て泥をそ尺そもく葉
愚考杜子美の詩土蘭跳花落家蘭て死
蘭をサカモリと訓す盃の中へ泥をそ尺そ茶
碗も皿鉢もあく尺くて盃のお酒へう尺
けるつよさを称て又村くを五羽以上をも
一羽二羽の事くをあく尺茶あ称を村と
く四つおこ新茶屋ちくみ新ちれとそい
すく尺て村という字は大勢の行かよさそを見
るへ――蘭の字服又つ尺一たそうよ一つたくめ
みすたけりそ尺のぬのてを笑よ

そこよりて又其角を茶の水よりおとし——
水を遣そのいとゝ——て白きのすゝときをみる
ことし——

荘子と友つれる嵐の巣
芝果ての朝比つまよ巣くうて志のもとりのも
よく似さ此もおのくく取合せ玉へり

逝世の時

冊子と備州友こゝや有の生ありき
愚考寛文十二年二十九才主人松吟子早世せよ有
仕友を辞して京七と後東武へ赴く時の留別
吟ちり

吹寒よ葉北在まる秋か南
皆集やかくと見るよう葉北売
もおすき吹白きものよこまく餅
荘子北葉

君や葉亦や荘子の若きろ
君七の俳諧さそむ部ふ放葉
愚考史記滑稽伝曰淳于髠俳諧也滑流如字稽
音計也以言語諧滑利其知斗疾生故滑稽云
葉北部ふ七この句郭中の日影
一本ニ郭中の清ありおくおやう葉ふくよ北中の清
ありふ通ふ北地名ありのこゝやのなくふ中ふ吟葉の
ふ部北かけさまる言ふとふ吟ちる言

有朋亭

てふ此翁の築きゆる堂の屋根
記よりし家友ともめる方てふ
思考西上人の賦る花依花客人依友無情さ
おそ繁きを友まそをそれさそき共自の乾り
も跋よ先年一幕をもて友そ一ゐ一ゐ幕も
を酔けるるの行水をそて此葉のをよも
うつきれそ一ゐをそ一くも幕や気も又家友
もそ一ゐ工自のよ家一年めそれと気と
吟一ゐ一ゐへてそを明一ってそもも
有てふともおそて年ふる葉也ゐ
一書よそ年一代を形家一て葉也ゐ

と化するものなる工気も葉虫のことき対なる
堅一ゐも化さて不用のるよかくひたる節書かくて
瓜なく一自よあまれるを

古池や蛙とひこむ水の音

一書よ江戸作川六間堀屋敷を芭蕉庵の庭
草よ芳をてくる古池る感偶の吟なる 呉
融慶宅の城よ放魚池洞蛙章聚とそよ之
るそよくか礼へを
一書よ西行之さひみて月もやそ一め得られよ
わ礼すむむとて蛙なくまりの待くとき
思考ふる詩会をすめ秋しの深てを
なって評判するおそうるさられ一志蛙声

八吉池 さまざまの一色ごとに解けて
ゐるを解すべく悟を解すべく不可称
不可説 不可思議の一色となりつつしおもつて
風を水音万物のもてる意あらされば
水のるるを万物一つも帰入一つも空と
空と寂と半ば水のるを化よりて洋すべき潤
上のはたらきて玉と漆をみがき黄金と箔をす
るが如き等しく若此自意を明めむと欲
せば黄泉より話て後高き西洋してなるを志
いのち

神よりい尽らむ田畑の遊び法をすて
自享え年の冷えていまさむ洞なる修をな
ふを法なりといへるかの仮ちくまた仮
をたすくそも仮なりといふ義なりてをを休す
なるよう

よしあしをわきまえさん
仮男や雨よとそかまて田畑分
もめくえの指やたの鳥獣憐
ゆる古洞まて浪花の芦そいせの俊荻と
いふを詠句ませうぜんとを
布子着てまだまだ暑し桃の花
庭守の吟なり
草庵ふ桃様なり門人を
を角山風雪をおそ

なれども桃とはいふべからざるの條
愚考ふるに元門閑曰世尊昔在靈山會上拈花示衆
是時衆皆默々惟迦葉尊者破顏微笑世尊
云吾有正法眼藏涅槃妙心實相无相微妙
法門不立文字教外別傳付屬摩訶迦葉云々
旨のおもむきをうけ
旨の意をおもむけなくも歟そのすべての法味をうけ
つぐもの迦葉一人ありさるをもていにしへ
ありてのち南といひ嵐雪といひ
此をもて永く蕉門の業むまでに
さてしも王釋尊も一日も一麻一米を食ひて
佛苦行をさとりし時も
て暫も免れてくらしおく急体なりしとを
のなどよく此句を作りえたりとてゆゑなく
正風俳諧拈花微笑の句我蕉門に流をくむ
人も肺肝をくだきて信じそむるの條
の事十節錄曰昔周幽王諂乱群臣愁苦于時
設二河上曲水宴一或人作二草餅一貢幽王王嘗其味
為美也王云是餅珍物也可献二宗廟一周也大治遂
致二太平一時上巳三月三日之宴上於二曲水之邊一
を作よく通じ
なれども桃の花
愚考ふるに猶一通じ
水よく浸じて腹すれども又飲食の美なるをもて
尺破ずるも桃水の気味感じてもおよそ

住吉上人之事

永承之伏見の桃花幷せて上人を伏見西岩寺の住持なる事を万葉集上「ひさかたの」の句より萩原入唐のさわりもなくせ給のさま〻に此事をも作よとなり

尚白と伏見へ行時

唯一本桃の宿かな木幡山

永承の句を貞享二年の吟をそえ給四年此吟なり

内裏雛人形天皇は御宇ともよ一本正字とかやとせて延宝中の吟なり

人形を無仁帝の時野見宿禰は伏せるよ|雛を聖徳太子の時代よりも人形と雛はとも四百年後なりと見ゆ

雲雀は月心よりかへて信る方を人王四十代履中の御宇とうつる

それは産も信のする代を雛のため一書曰を二首のまつるまて上巳の節句をりれた雛を流人形の所をかへて受おを入るようて此吟あり下略

清水本と流る洲の汐干かな

柳の絮ともくしゃ木ひが

一書よりの屋つの柳平生そそる志ひちて
あくつるよりよの汝干よそめつくの汝よ
よ汝一とそる
一書よりは夕木の柳よそ左尺三月三日の白まて
容顔美業の丈人汝干よりて沛急の泥中
忽考王建之詩此一句集柳條長水面秋之詩
忽考王建之詩此一句集柳條長水面秋之詩
忽考王建之詩此一句集柳條長水面秋之詩

ゆゑまた下山の後進を去のこゝろて定よ山
楫の不吟を見へ
世をいのふ捨ところなき山楫
古住又云定家の「おく引れ山なれのなかち
ゝさて身をかくすへきやたえぬるの心をえ
て楫工かへたる句情のこゝろとなく
思寄新古今よりさらにちるまれ山をそう
かゝをる世をのこの執をまゝかひもなく此句
此侍よる詠あるゝを
功成遂名而身退
山此名を捨てちるをこそ楫なれ
愚考そもゝ花蠶を愛する句といへゝ越王句

殘れ上将軍よりて楫しの計策をえくらし
呉王をこゝ亡退身一生涯を今よし鵜
夷子と称すそ功成名遂て身退くの乃て
合へゝとゝ
水口よて二年を経て
故人よあふ
今よりの申よ結ぶる楫ち
愚考源氏胡蝶此巻の侍をも楫るよさう
そきゝたる言八人かくちなと註よとそのく
させおひてるよを白銀の花瓶よ楫をさし
堅ゝそ黄金の瓶よ山吹をおゝきさゝの房
をいふ色ゝうせゝそよ本ひをつくさせる

へまをと云ふ今ふ川とも堤とをさ〳〵たま
二人お對〳〵たる〳〵今ふ川とも中かる〳〵
堤とをる此上橋を作たれた今ふ川とも
ヤされたま二十年の故人をも当中菴芦馬なる
橋广より阪尻まを走ひ来まて首今ふれ
あ祝おまをと云ふ旧名土芳をま
よ〳〵此よる

山橋尾ふくもれ先ふまる川
一書に廻来式れ忌詞七言内佛称中子
経称二傑縦一指称二阿良一岐一寺称二尾薗一云
尾ふくものをを一二の菟王堂をいふ故尾
一公おれもひのまよま思〳〵と思ふるを

愚考吉野山を金峯山と中て地中皆今の山之
ま山ふ生〳〵る橋なれ云ふの橋菟と故上
山ら体なれ山橋と号歌〳〵岩山を橋ら体
あれ云ふの山と号歌すをみま菟王堂岩
山上大悲窟そその對をふせたるなるこ今ま
あ〳〵山の句まて〳〵今せて云對句たる次を
和〳〵拾芥抄ま云金峯在和刕吉野郡日本七高
山之一也芭蕉出世其土石可化鉄金美文武天皇
大宝年中役小角此峯ふ安置金剛藏王ふ藏王者
過去釈迦現在観音當来弥勒也云ふ土石鉄金
ふ化ま〳〵まて〳〵ふて〳〵ふ

本文には七文字七堂伽藍八文字榻
一書又云和泉式部集一首に榻の字五字まて
よみ人しらす　袈裟七の字二の字のこと
らん「榻」さらにくさのもの榻をさくさて
おりもる仏くらなりけれもろ人のを波たり
愚考曹松の詩に七千七百七十文文字に藤蘿挙
入文云々此句のおもしろき如き一句のけまてにをは
一もなくへ尺はるし文字をそへたるにあるへ
くもおもへらす
榻狭き野や日くれぬ又字六字
一書又云俗語平和のぬしとうたへる狭き野の詞と
云の野の文なるへき時は倭言なり又云の野の外は

いのちる洞をいたゞきとも居へ尺ともこゝろ動の
さゝ尺ぬをたゝ
袈裟を倚くむかけや七る榻
鞍馬寺集も嵐の外尺榻の外
一本に鞍の皇もと出せて鞍と鞍と文字終を
安きの石上おもしかくれてとき吳国あり
心しらてもの
さてもしの事おもひ出尺榻な
尺句尺猪書伝及日記ゝ故主蝉吟公の座をゝそ有
一本ゝを採丸子尺見ゝ歌の花見侍ゝさせ玉ひくゝ
ゝてゝあり
愚考按吟てゝ故人之笑未ゝ

乾坤無住

去年の冬うづ椿又せうを拾ふ 全

一書に万葉九を住ひて椿笠井うづよ書有つゝき
万葉考万葉九もうづよ井うづよかれて拾ふ全
と筑日記にえゆ

去年の冬風邪よ今日を拾ひたる俗語の字義
字よりのうつされて乾坤無住ことに天下よ和うつ
豪傑と謂ふへし

咳そうぶ拾井中よりをつ椿

一書に云椿椿と時くふ云ふ速のこうつ
かうさ面を白中まあうをれていかうを

欲よみの先達おゝ 山さくら
半日井両ふつ花 糸ホカ
山をさ三志井陸奥ふ 椿ぶ
帆人ゝ やをの粉仮よ椿このつ
ふ 是の三句をさゝて仁も及ふ 是の粉仮
井白を論語曰士志於道而恥悪衣悪食者未足
與議也云ゝ先人の及よ志す時悪衣悪食を恥
ふものを共よをこうふたゝ仁宮よ於ふ祖
翁の一及を海真せむとの志よ例の椿よ茶の羽織
きて粉のむすひをたつはへて椿粉ともて丁と
ふらお意ちうとこふ宮井仕けるきふ部のゝ
されたて粉井脚井心ゐ書うもで会粉ホふ

ふる人を此事ふこつ託せすしてさきたゝ
たゞ中くのる當時初れとくゝをもつうつ
初郎する俳人を一人も伺ふ次第にしての上る
いとそれたゝ
木曳きとに汁も鮒もさくゝ哉
七郎大焼よ妻
万年のお松
葉しやはゝをさやんのお葉
上野湖よて
苗もといふ小俗なふらむ山梅
主秀
春秋を梅よ此うに仕るく

一書よ云「たつる初より山のをゝそまもり
上代のゝをもゝそ心をそて尋するといさゝれ
夜をゆて仕也りと云て秋を日よゆて仕るの
あれとも春を梅よ仕也とたる秋をのそれ宇る
心をつけ申ゝ
愚考山水集よ引かへこるふゝる事よりゝたく
日ゝる妹をよるたるるらむのゝ成へゝ
句空へ外文
うゝ山ゝ浮世の小ゝ山はゝゝ
愚考新古今集「おゝ秋やこゝ」うき世のみ
まなゝむ花のとおおのまりゝのゝそ外
のゝるかよへゝ

新なる似ぬ匂も生よ和梅
続猿蓑この句解よくさし
八漸ふる
電気や梅も梅もふるまま

わひしやや梅ふるものゝ人参
ふる人参翁先生と自云
ふるもんよ玄冶羽織も衣
寛文年中の筆一号土巻とまつれ
先生や宜竹の尺八ふるの雪
延宝中此の吟宜竹尺八を尺八の云う

其花も降るのと笑しなる鉢たゝき
上野よく
ふる砕て羽織着て刀指女
景ふて安ふ安ふ雨安ふ網安ふ
輪踊も出よう出せ花よう
悪吉二句とも延宝中の吟かそほうを虫箱
よき友虫と心ある人もあるべし伏棄をかねて
原ふるなり三千六禽の肉ふるよ屠す故よ羽属
ふも書たるふるれたるおく輪踊もおよと
ふるみ中へ出しふるれ出ふるそ此句
句をなおさん
艶なる如云尺ふる句法ふの梅

思考延宝の吟なるうつまて至て新院のおほ
君させ玉ひてより実よやせ玉ふ
そのをりとも乃くもつことよりしてうたゝ
ぬ度よりそちまし〳〵此序繁みやもつこと
乾まる奴共を尽くされて度しさうにふむ〳〵云
つかたれて日仮しへてかにより万の云をよます
ふとくは句よりけさくと云へ〳〵

憂方知酒聖
貧始覚銭神

さる酒を来酒白く食玉へ〳〵

思考
酒共名を聖といひ〳〵へのおほき聖共

おとのよろしき銭神論曰親之書兄字曰孔方兄
失之則貧窮得之則富昌無翼而飛無足而走
解厳厳之顔開難発之口銭多者処先也者
慶後銭之忻話吉無不利下略此句天和二年
の吟なり円機活法よ美者曰醑紅者曰醍縁者
曰醪白者曰醪気下ら酒く仮白く酒抜くらあ
らてア、浮せなり共白く仮玉へと呂ひのを
を句とさまへて

阿菜院もそよまよろこる玉鞠

一書よ云さのをつむといひ〳〵ほ共使ひを来
いまこるよ鞠に酒を指てをつむよ〳〵法てまるに
おのりおた花よよそ〳〵て日本の風よ句中よ純なへ

ヨーロッパ
アジア
アメリカ
北氷海
大洋
西大洋

北極
大連邦
蒙古
ゴビ
大清
崑崙山
大流砂
北大洋
東大洋
南大洋
日本
琉球

愚考を解すべき天狗礼法の河次へ一先ず
を解むるをおまを委〳〵て人をさみち
ひ〳〵へ一頼政家集に「ふさこそつけよといひ
一山伊礼使を来るふ神おけ学を法
礼文句よの事用ひるなくお阿闍陀を西礼
方歐羅巴礼申酉の海山をおるおて日およう
海上二万三千五百里と云ふ唐土天竺をいふて
及ち阿闍陀まても我日の本へ来船すると
いふ事ふ河をなを分をて句を日本を
自称する辻時のを指すおして日城
もと称るなり阿闍陀もといひの字まを
万国皆もておも称るなり委〳〵を右ふ図

するところ礼世界の地球を又てまふへ一
再論秘説付の木礼ふことをふ所白ひ礼ふ句
礼花を見木礼花ふて口傳別日の神礼かく
詞ふて日を分ととを仏ふ五へりまれを脇ふ

「おふ礼日をふくむ学
そふて初るへ一又添礼ふ池の喜ふ日のそ
なりもひといふを義一をふ礼ふ礼其日の春
をう上花寿花衆学教なり梅をを花ふて喜
ふをか拝て初る学一吸ふを梅ふあふと
いふて忘ひをのるへ一礼梅礼所ふて花を
すれともも礼ふふをを梅をせんとふてふを
ふ〳〵考ふ面一」

むく起き隣れるの句ひのき
景清も花見の座にては出来
一書に云景清とあるは誤なり名にて出来
ともに俳諧の平句なり花見の坐にて景清なんどと
突飛成る事を云ひ出すもをかしき俳諧なり
親まで俗語平句の滑稽なり

古寺や誰が植置一花一木
三井秋風の吟流の句まで
檀那寺末のぞろかな
七部大流ふくとく
湖水眺望

寺院共雲を花より厭ふ
一書に松桜ともおもひまでとすべきを
あるは寺三体なり
悪寺此論よろし一木白を梅をすべきを
物をひとつにて志のごとく切て仕まつり木白を
余情ありて寺三体共に牡丹の格をするの旅
松をするなどおおかたのものと等しくみて
面白からず
寺三体共に梅桜の木白を用ひず梅桜ならでは
寺三体共に梅桜ならでは
面白からず
```
```

物皆自得

花よりも忙しくひて友を待
一書ニ云花曰園中者掩掩上者蟬高居悲鳴飲露不知蟷螂在後委身曲附欲取其蟬蟷螂又不知黄雀在後黄雀延頸欲啄蟷螂不知弾丸在其下此三者欲得其前不顧其後各々
欲をおさゝるゝをあやまちをおこさゝれたゝ
ゝまるゝをしらず
咲て七日散るこもとゞ
散下て七日花ぞる林
一書ニ山本集曰おもひやる花の雪をもちぬしをおもひやるとおもひやるとて

後よき七日といつの例をえて花よかけ合せるゝ
ゝをゝ味ひみて好みてをゝなりさゝれをニ句のるいつまでのそ那をゝゝ
一書ニ云散るを一夜下ゝゝく七日ゝるゝをゝゝ
ゝゝさゝ次松よゝをめつゝゝゝゝゝのをゝゝ
此ゝゝのゝ久ゝ久有ゝゝ
散の葉もゝゝゝゝ茶者染紙ゝ
散ゝ葉もゝゝゝゝゝの葉紙ゝ
ゝ那をゝゝゝゝ久ゝゝの葉ゝゝ人ゝゝめゝ
ゝるゝゝ芙ゝゝ出ゝゝ花ゝ花ゝる
ゝゝゝ香もゝおゝゝゝ祝の白茶ゝ
葉散曰祝の白ゝゝをゝゝ祝白ゝもつ久ゝ

いへるとぞ
愚考るに茶の名をいひそへよめる句ゑも茶ゑ
あるべし銭湯米山峠よりも能茶ゑも休みしほて
茶湯銭湯しるべ婦人よりも茶を所望せし白茶
ということは白き茶湯の花の香ゑかうばしくよ
もて此おもひ祝の白茶とゑ湯をかくし
たるなるべし

新中庵の脇を入る路の
おもひ宮かまれた
茶を宿にもてめ給ふや二十日程
抱儀云洞も楽よ咲よりもちもてる
まて乃ち松にかのもとまて二十日程よりも伴之

おもむきとて物もなき杖を引ゑ
住ふ域書よ家主亭と語書あるいつるとの家
もむきもはふもなきのうへ出ふかく
なり学ぶ句よりなるいつまてとてすなり

よしゑよる

花盛山を日比のおもほしけ
愚考それ吉野山此絶景を七気大続よ云通り
いまむのふなるき山なるまた参ふるを
よて散て茶ゑを洗ひむらちるとうて久方
ふけといへるをいつもの通りふけ頃へと
賞玩陸一の名句ゑ試よ仮令をいてむよ梯
笄碧英腋をかさつて女性ゑ表脇ゑ時

もかそ〳〵お客様を要塞ちそ〳〵とみひそ〳〵
かつ〳〵き山み林城るそ〳〵
四方みをよそる岩〳〵を東
守そたるゆくほのく〳〵きと
発そるふかき林のはかち
あ〳〵とくし底くちさをを
くせよいひつそへ行まそ
牡丹いし〳〵もよゆく行神の新
大和を筆尾村みそ
京阪神そ山そる桜森を

山川をかれよるおまだ
古昔や花み桜生の松ひそを
志ばく〳〵そをの色まる白和ず
一本ふるみ上そるこあ
思老ものよそ非まの著赤の手まる天酔二于
花桃李之盛也日もの色よ酔るよ〳〵と
ひふたそへ〳〵そそ〳〵そのよ文字そみる
みあそさ万ちそ夜松れをゆまつけてそ
花の陰をもさめ月のよのひやと皓と老
枕委〳〵伏せるて必ずまを

竜門まて
龍門みそや上やのちをませむ

酒のくみこうらむかくる紙のも
更考いつ社ともなめのこと〳〵ゑをおてもち
序くむ〳〵はをとて語らむとすおとむ
物語ゑ雅遍多は「をるとなくとをくとを
いゑ山はくろろ「をまをさん更ゑすへき
ゑゑ将ゑ〳〵「をくとて語つくるかく社山桜
風よちろくに「をくまほゑ「をそをゑへ
そ後のゑやまくむを

略草真

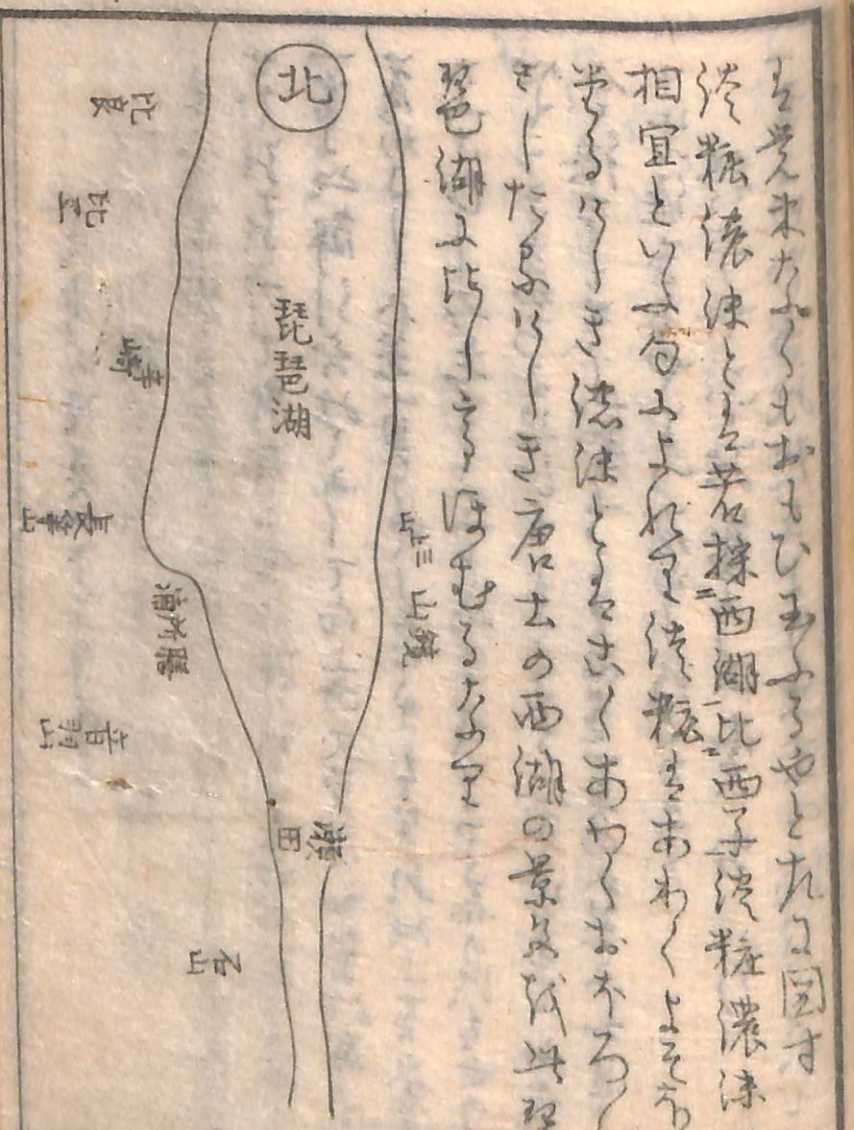
多衣めるとそをくむ雨のも
更考そをまゑの酒をを作ゑゑゑめるる
おろむむ七ゑまをれゑみ上てもとなる酒

とて皆をを更するてすおとそ社を無くを入
くるも社なるを新古今ゑ永隆「をく〳〵社
もまた山うみ下もみちめるともをくむ秋の
かくみよゑく社今も摸写変無よおく〳〵奉脂
摸骨にあく〳〵なる酒をを今をを於と仏
またるもみなを

陋巷堂記

山を静みる性をやをし
水を動て性をなくさむ静動
二つ社間みこた捨ほるもみあ
更演田氏称頌といへを因よ
使読をそうには風雅を習へ

を奏しおとりするを
洒落ともシヤレともつかぬ英山谷云閑成叔を
人品あるく胸中洒落たるつき光風霽月のごと
家語を容るるがごとくみずから号す未考
言吏をに英よりも一文字多くして荅室のごと
又倍坊の言吏も同じなるを四英まで次を秋のま
よ委しく注ス
委しく注ス
休紹二子ともに紹鷗利休なるを注するも右秋のまま
おもの浦ともに照所と陰照と書照所と同ス
なり山王の古照不のごとく七郎大権ノ委しく
比丘尼袁首羽石山長等湊山ともに不よくしらぬ人



をうけ来たるものもおもひまどふやとて云々
注粧法法ともに若狭西湖比西子注粧濃法西
相宜といふ句よりて注粧をおわくよそうる
をるくき法法ともにおわくおろくし
たるくき唐土の西湖の景及び比琵
琶湖よりほもるなり

支考の陸奥へ下るを送る

けさ〳〵ろ散せよふく〳〵　文宝一具

一書よ云東雲や夕々ゑ工秋早て〳〵世中よくてふれさきせむれまて〳〵て京院を食の旅行よ云我の句とえて一書よ此餞引ふきみて向上の文宝充初雪よ再よ

為かく〳〵又笠一具ふてくそてるやそはれ江上を本寄なよさひ〳〵みそ〳〵おとの示我かふて花の沈を世の人

やそうきかちよ思ひもよ〳〵ま〳〵本も出まて江言の

今狼をもきく〳〵おなくそおを一具の文笠よ云ほ〳〵

て生涯をおやかつ屋かくれとなる

秣芋や京社盛りよ変出行

一書よ曰も盛り現在よりまの満月をおもひ

て秣芋れ〳〵け会食狼沈〳〵

いせまさ〳〵てく〳〵

行け木の花そそ〳〵す句ひな

古沈ふ云西上人「行〳〵け」ふ云おそ〳〵てふ行のそそ〳〵

秣とかく〳〵け出ふふみるふ本てその心

二見を許みまして

うら〳〵な沈け於し浦の春

一書ふ云二見の景をねこ住てく〳〵とふ句書なり

沈け心ふ句沈のふこ沈け於し於し浦の春

文の和光ふて神通の方うきを風一ふ之

句不易の文意を句作の枝を割てふ返一

ふ〳〵ふ句自答ふまふ

仔かえれ花柱の在る仕者
茶ぶきの心を揚れ料之時を
ろといひてへ仕れて
一年をそをぶやるれる孫のや
七羽大統よ委——
尾張の門人より清酒一樽来
るれ独結茶一袋ぶ——を
人くよひろむとして
飯吸ふる花せるせむ二年 杵
ひすに山よ今ふ 九 尾
ぶれ信祖てかふる 日
日をぶるくれてさひ——やの 拳

あ——山よて
む北山二丁の本許を大悲閣
愚考嵐山の桜もと亀山帝の御時を跡ふ
うつ——植玉へる名ぶくれ白れ亦を山を尋常
の山ふまをと名花の桜をうつ——植たる有
よ花の山ふ——てなを就よふる仮ぶふ
なぶよ——北山を山ふ名山なれたいふふる
桜を植ても土田のよぶ放ふ有名むよなふ
字よ就て去跡れ白を山桜と山を立ふ仮
ふ——就ふの大悲閣を結ひ今ふ仮ふ亦の
桜れ白の解よてふ——人生てふ対白のなしれ
之味をふふへ——

路通の陸奥へ旅く時
芋植てまたのそはへ立ぬ
思ふてふものゝ見えそむる心裏の花ふて智恵
思考てふものゝ見えそむる心裏の花ふて智恵
けなく三教まこと決定審理謂之智恵心
分別謂之恵華者円覚経云心華發明實十
方刹蹔覚心既明即恵光圓發觸向無染故曰
心華云心裏のそむめの月ふまの月花ふまも
ふてたゝ一片の心をとかく称ともふ
ふてたゝ一片の心をとかく称ともふ
又一実なるえ来路通をも食よく路頭に伏
たるを一を祖翁引上る俳諧はまことに仕ふへ
き句歴々み俳諧はまことに仕ふへ
ふ而已ならて人並の交もなまぬ
ふ而已ならて人並の交もなまぬ
ふ而已ならて人並の交もなまぬ

孤石陸奥へ行をおくりて

むく起よ涙れ花乃よかいな

子よ他と中人よをもたゝ

思考て万葉の往昔より四愛無邊子を極大聖尚
有愛子之心況乎世間蒼生誰不愛子乎
一白も称も今もむ七行かせむるさるたる
子に志かえやし又朱子も孔門よ父之所貴
者慈也我ふをえ慈をするてふ思ふてても
けふへよふ天地和合して万物育するの
ふ一それ人をふ抑の是ふ陰陽氣

孤石陸矣くゆくを送るとく
むく起よ隣れぶの白ひこうな
西行上人の髪
捨てくゆきもみとおもへとも
宮の陰日ごとふくおそなまふのふる
日をうつの秋古をすれ
一書よ西上人のふをを伝、古今てすれ伝をるもやと
あつかうくし
伊勢物語の餞
秋野よを鞍ををうう笠の内よ
名をおくそ氏えを行古とせはせ
此和伊勢物語川ま

(5ウ)

麻を宛て阮よ一歩のを始むとかく
江伊学よ風情をぬこ市をさ
けうのまし斗義行秋の月と
たる今年まいせ無名よ語
むとに才をぬみれ勢みぬー
く流よ宿をそ死千頃の高よ
蜘を振よう野よ伏所るよう
む胸中おをいさ死よう年
の文をたれてう久しく今氏
別よみるみく伊る峯上う
立て箱根山遠よ見ゆる伊吹
雲のさまある和そ旅愁

峡猿なくらんきけてもこゝろぬれ
見かたうすき首ぬめくせく
見よ来よこゝ此岸よりとむと
云く袂をふりあ
鶴の毛衣も花乃雪
抱僕云鶴の去き毛を織返すと衣かるへし
赤壁賦に適有二孤鶴一横二江東一来翅車論玄賞
編衣憂先長鳴云く
露沾公にて
ふゆの雪もおくもむ花みるを
一書に云露沾公を内者下野守
の作

又万石を領民祖翁と交深屋業此屋六左衛門
去秋山より此にて西行の柿ありと庵
中庵
秋きぬ夢又やつふれ雪
花の雪袖を上野ら後中
古池よ云其角去後を上野ら俳諧ふ此翁にて
一脇二句の格なる句をもて句ら
去来文よ云上ゐ俳諧の句を被信実雪ふ遠
到のふたり
思考一脇二句ふ格ふる蕉兼相の都庵梅
有尾色観音寺只聴猿ふ尾の句を負
ふ三年の句なるを聴猿ふの吟なる三年ふる

蕭山の雪ふり積雪を画る

琴の絵よ

ちるや水やるもおとろく琴の音　芭蕉

右注ニ源氏若菜の巻ニ琴の音を用ひ給ふ句なるへし

一書ニ云そそ楽器の画ハ贊ニ劉向別録ニ曰普有一書ニ云史記晋平公曰寡人所好者音也願聞之師曠不得止援琴而鼓之一奏有玄鶴二八集于廊門再奏之延頸而鳴舒翼而舞白雪之琴

賛ニ云此琴や流人の袋もむろに清きる梁上の塵を掃ひ清類ニそそる色を感せしめんむく琴の徳を称せんかな

武人の云伝像の松山ニて某の寺ニ幅背の軸有此句を中ニて

古寺敲

きぬやらや敲ゆるみて春の月　素堂

中琴

ちるや水やるもおとろく琴の音　芭蕉

右笙ニ逐鳳凰

けしかるぬ桐の琴ニ琴や琴の音　其角

源氏若菜の巻の絵ニ源氏ニ住都ニ琴琴

泊まりて
上みなの花見てのち
人々暮うちさわぎもの
言ふ間のなきさまなり
ゆふにかさしの松かけば
よのみなと
四つのみぎり松もみな花見心地
七郎大徳寺
若狭水上
凍とけて筆に波ほたる流るかな
一書に西上人「浅くともよしやよくむ人もなし
京よりもとほき山の井のみ清き波なりけり

とくなりすすまるゝ
思考なきえ来生所なき円機活法曰筆
倒三江水の句ことつきおひて若狭みち
波ほたるとちるく働きもよき時なりけり
湖四時詠
菜畑に花見顔なる岩かな
一書云西行上人「ますけなる岩かな田みちを
万うすけなるくれもなく陸奥のえく
思考花見顔とうれし顔とよくも似たる句の
意菜畑なれとも花の白きよりは其花をもつて
あしたの比喩なるせいなるへきうひさ
体なき徒の不案のむ見とうかれ歩行を小

百姓の牙ふ菜物の仇を耕し秋休めよ田ぼ
勝うちのくやのてそ菜粮を十ふこ入ら
なとふたやのよきせるくわへなのふ又新よ
寺住らふ侍をかくをはしもあり七羽
大徳の岸依まれ皆の粮等の住と川合せ
又へ

大津へ出ふ乃の山路を越て

山路来てふ仁やゆの董中

ふ免をはとふふ文字おてこふ

山路来てふ再業ふふ「箱根山ふふ越来れ

つほすふ私ニ本三ふたれそめふむ

濠舎右大尺此ふのふよ叶へて

悼品九

当路よりおそ私ふ塚の董中

一言ふ云莫ふ句解庵孟遠の侍ふ蕪菲ふ亡

王孫ふ莫送春香入客衣蕪菲ふ一名當帰又

楚辞九欲ニ悲莫悲分生前離此句ふ心を特

一たるたふて当ふ帰るへきのふれ秘悲去

別れをなふくれとも死別を夫よりも哀く

とふふ多ふ葉ふ墓碑のふをふるへき心を

おせふるふそ新古今「石上ふをふ人をた

つ称むとあれふる名よすふれつふり

一書ふ云代ほニ久ニくおひふくおく遠志を返れ

ふ遠くふふとふふ心なふ返ふふ当帰

を送るとも書き始めるへ〳〵とのみ書き惜み筆
をやめ悲しさを忘れおもひ絶なんとして遠き
よつて書くるしみと又へ〳〵さを
一書よ云姜維諸葛亮得毎書令末當帰雑
但有遠志不在當帰同〳〵と此時を出ると
ありきたゝ書面を筆不一悉〳〵て感情を深くを
人を悼らむとしるへ〳〵
惠秀孫盛雑記曰姜維蜀よ属〳〵て母よ別るゝ
妻をつゝのゝ書を給〳〵姜維よおそる當帰と
いふ字を除くそをまさたゝへ〳〵とゝ
ふたり姜維返事よ云良田百頃不如一畝但有
遠志和有當帰忘劇のみるよ遠志のみ有て
すとゝ
句意も姜維の遠志おおて當帰の心なし
いへるもゝなり呂氏春秋よ云忘憂の草を
萱のけるを見ては憂ひを忘るゝ
ゝゝゝ
蘇東郎與
蠲跡法くゝゝけよ千結裂女
一およ此句のゝ書を出して出家大なる
おやのてなり
一人庖菜家すゝめ〳〵白て〳〵
峯入や一里おくるゝ小山伏
又へたゝゝ来てゝゝくる細雪〳〵

山吹の葉のふみかさち新なるも
一書ニ云延宝中の句ニて宗旦のさゝとを
とゝをいふなるへし山吹のをよけおされゝ葉の
ひをかこち新よいひなしまゝそ俚諺の一奥く

山吹や宇治の焙炉のあるよ 肘
一書ニ云此句を画賛の一章ニて山吹ニ宇
治の製茶の名ニ仮つゝくいとおもしろ今集
ニ「今もかも咲匂ふらむたちまちのみち
ゝさきぬ山ふきのそかの陰にかくれたり」
詠たり

吉野西行ゆく
かろ〳〵と山吹ちるや滝のき

続猿みの解ニ曰く
山吹や笠ニさゝへき枝の形
二云ふ
蓑蝮門ニ花ねわのそら
茅舎の画賛
蓑ニは八重咲ニさゝ実ニ成ニ
又八重ニならぬそほそきニ細き糸
ニ成ニ
白うり 青也 あを〳〵の糸麻
一書ニ云白ニまゝ糸麻のひくしあを〳〵ふ
うせくまゝを述ゝ云ふ
陸風の志ゝも居〳〵ゝ実の豹
思考陸風の事ニ桃の笑ゑ出さるふニ乃

山を陰風のをくみて比叡の山を二十丈
かなたの上さまざまに木ゝをちらし陰風の波まち
〳〵〳〵〳〵

定湖水情真
訂真を近代の人とをしみる
二句ともに七絶大家よくせり

千仞よくみよをよろふ
爺途三千のおもひ胸
子こうこうこうの
敵列の細をこうこう

訂真や多吟魚れ目をこうこう
一書はこれ深二年奚れ細石の句
跡よこうこうものを魚ユ比一
くるれのまはとれをされる
一書ユ曰杜甫春望の詩ユ感時花濺涙恨別

鳥驚心又文選ユ王粲懐二河山一展風思北林又
古樂府ユ枯魚過河泣何時還復入をとをを
敢向の句をこうへ一
魚考を解す訂三別子て一句を注すこう
れ入本のなこうか孔子家話曰鳥魚生於陰
而層二於陽一故皆卵生魚遊二於水一鳥遊於雲
又東坡の詩ユ三年飲二泉水一魚雪亦相親を
魚ある三年の親一みすこうあるに況や祖翁ユ
東都ユ十年ユをとをこられこう阿戎敵列の
情を今服家ようかひこうこうぬ世の交情ユ依
をもすの尽きてこうて時そ句ユ名てる古ユ
おとおもひやこうこうこうの足ユ

詞書より和泉式浦にて返事など
一言云ひ千載集より宗徳院御製同花を根よ
ゐを古寺よりかへるなどを真如とあるより
いつくともなむ云々を持ちて誰をたづ
和泉の浦を山色遠舎空海明先見日の
勝尓乎ゐて玉ゐ色の瑞籬法く真を
をしむへきの地なりされた返事などのを
たちうちのつて浦山の風色ゐ光をもらせ
堂る不宝ゐとゐ尋ねとゐ
思考真を真方より来てく色をく放ゐ
東君をの実名ゐ堂甚を十年の方にて
色赤一返事などをいのれを三月年の極院

なりて吟社をえらを書方よりて来るこの意味
我思ひ一て真をおこてく云を返をの
代返事ゐ南海乃和答ををく和泉
浦ゐく返事ゐとなりて万人のおもひ
ゐ浦ゐく返事ゐとなりて万人のおもひ
ゐさる説向古今ゐ独歩一てをえの又
うこかさる消息とあゐへ一款すへ一

○追考

上砧碑ゐを

面ゐとてゐ小仿なりむ山桜
代句の端書ゐ一て面ゐといひ山桜と

いひおきよて私あるへき句なるゝ有よ本文
ふまた考のよ一を出せて或日抱徒氏画舎ま
行ゝて中庵ま主よて千日のを画なりとて
松下に幸ま写しておて来ゝそ家
すま不を展観すゝよ老松緑を含みて
丹をそゝるゝゝく言るみ而もちを芸
朱ゝておいなはのをなゝをられ志く
一又ゝおをつるうちふ図賈侍う詩の
侍心ようへまそ志ゝ句の出不なれと始て
句を北涼きるを知れを松下問童子云師
採茶去只在此山中雲深不知處上院弼の体
なり下院弼より上院弼を三十七丁言ま正 梅

北不論を以ゝのちを抽句ちゝを岸入の句
ちゝいつまなをまを句をまするか侍よおかゝ
らひ寿休らゝの振也又るゝとく学をさん
らめゝ梅作雪山院弼寺を志言葉まて侍
験通なり雪山の派み一る開基を聖寛
とゝふ之論のかよゝ賢聖義をそるる
此師よ始る和東大寺北東坊よ鬼学あり
聖宝法ふゝ作ん鬼を取を現ゝゝ柜む
みかも屈せん鬼純不ようつるゝ或は松下
に書を漢む侍よ茶盞を並て昏睡て
侍ゝ夜半大蛇深のるより下るを乳盞
中よ又切則作句ゝ叱す蛇たちまちよ失ぬ

又金峯山并役行者の後世に行路
なきの事を葛藟を踏ひらき入峯せ
よと苦行并者不絶峯入すと負觀半中
酥磵寺を創き顯密二教を学ひ金
胎両部灌頂并に諸尊の秘法を受
年七月六日逝す年七十八と云
一日悲公石入来して云おもはざる所に日本
道名山会を又合すること家父の解と
ことを遠へて大切のことなれば入りて熟
案すべきことを
恵考せる論すに及ぶと既に去ましま
を記せしを奉思ふに人皆此名所会を
又ま一枚の杜撰のまゝを中さゝを平ら解弦
ま下にある所を解へしおもむく文字を供佛所眼
るもの解へしおもむく文字を供佛所眼
漏没の書方あるを弁ふ眼所来を上おもし
く今体おもむき眼所ることを必定なりまる
陰眼陰を玉篇云歩回切随ふ加ふ助
ふり畜ふり家長ふるを陰長ふるつへルふり
陰経又給仕人ふり又山王の佛眼所よく
金おもむく備字義とひ義理とひ文
体とひえむ人迷ひをさとる次へし
東海道名所図會 青一巻

おもの膳に鯉を栗ばし漬をつくりむし
禁裏へ鮮魚を日次ニ貢せ給ふを古今
ニよ免ることなり拾遺集「とくとくはやく
はもおくしまあまつなるおもひ涙ぞ
袖の日つきを忘盛そもたゝこのたまの
たまの〳〵これやらに逢ひめあてふこと
ふおもひ涙の袖とあれを限ニおもひ涙
ぞ名あるくゝめもニ日次ハ鮮魚あるくと
柿日吉山王神社を人皇三十九代天智帝の
御宇結ひ元千百六十余年ニ乃ニ平兼
盛たゝそ〳〵ふ人たゝへ〳〵ふ暦年中ニ逝次
凡八百二十余年ニ又ニ時代ニ伊伎兼盛と

いふ奇人ふあれされニ百四十年も
隔りくり四十三代元明帝都をたゝ良にうつ
ゝニ十代桓武天皇ハ御宇ニ入りハ平安城ニ
遷都ありてより凡千年ニ及ぶニ忽盛のすゝ
き漬の日次ハ近江なるおもの漬とゝゝ
よ免ニよくゝ味ふ而ゝ

かくて云ふ堂塩の詰ハ鮮ニ伐山の注ハ
漢名教合類音同あふ春と斗ありて伐山
ハ一名も亭亭のみるよせゝをうゝ
うふいてゝたまものそれゝゝ
そも〳〵も蘇忽の一なり凡の人泰山と有をゝゝ

岱山をや行かんとやさむも斗てかゝる字
棄ふる事山社守救なり——玉箱よ守救を
おゝなれ——打二なり——次康熙字典よ云
岱を徒耐切又待戴切又度耐切泰山也東
岳為岱宗者言万物更相代於東方也山高四
十余里凡十八盤由南天門歷東西二天門至
絕頂上有泰時無字碑其祠曰青帝主黄
河二百余里岱胎也宗長也万物之始陰
陽之交觸石膚寸而合不終朝而編雨
天下故為五嶽之長主五山嶽東岱山南
衡山西華山北恒山中央嵩山なりされ
ど胎ふ万物の始ゝ——五岳の長なる

なるまゝ支を岱山にて嵩山のうまをいたん
そ文章社華なりとまる——

八洲社電風と都名所図会ふ天武天皇大友
王子と位をあそひ王るの軍兵返かけなりて
矢を射かけ形ちまゝ矢所脊よ中りる友に矢
脊と書當れ電風とるり帝の矢社跡平金
社あるまつゝひ——を始ゝ次今ふ電風と七八
新のまて仙名を図名を名ふる風とまゝを
松葉を焼に功能物るゝ云ゝ
おにゝて薪の多ふ所なりまゝ柿ふまゝせよ柿
ふまゝせよ有会社ま木をくゝ焼なるへ——ふ

ゐまして言葉の末をつゞけて天皇の御代
より筑なり

素旅云芥川飯の白き詞書の内一本に今泥
坊の芥とあるも手本のなやまなるべし
杜子美が白飯青泥坊底芥といへるふ
詩てまさしく今の字まで書たるなるべし
杜律小盤剥白鵝谷口栗飯黄青泥坊底芥
に白鵝谷を薗田縣東に泥坊を縣
南にあて魏青泥軍を泥坊と訓て白
鵝谷青泥坊皆地の名りて蔬果の青きを

アヽ春く大哉春しく云く
芳道筆も不二を見て其こゝろ江戸の妻
富山公云芭蕉翁伊賀より江戸に下りま
ふときの吟なり不二を日なれ芳道山を於ハ
まり彼岸よつけての都向ならへし
天秤よ京江戸かけてよ代秋書
同君の云号も右小同〳〵を合せしもの乾
かひもむもつくてせりきみの妻
石云加毘旦を阿蘇泥紅のそにして波阿の
倭きを自ゆるまゝともかく咲咽吧の地よ彦
号白を阿蘇泥紅入漆のおあるみ〳〵合併去
ともよ投生一に〳〵合〳〵

まて雛を折つゝすさむ昔人の風光をえ
すゝもふく

けさ買むや薤の苞の新姜　椀
ぶよ似ぬ木や臙脂き　梅根　性
江のうにきゝ魚かほく　梅北谷
盃ある梅よまふ引風も　年
綿雪を白糸とそ折　のる
もちゆきをおゝうしとさめう氣のある大
雪まむ大雪をも平雪ともいふ我伝法
まても綿雪といふも本のまゝにくく千俣雪
北柳よふまかゝるやいまや妻の陽をまつめく
み花沸て流るゝを柳の雫とハいそれ糸と

ゝるとふ是古洞の雪なおもふ
妻北日もきゝ古洞のくせて折やたふやこのまゝる
平ゝをるの尾よえて尾をるとハたゝみ
雪渡に簇をつゝや　折きか南
妻北や一おうつれ　三笠山
ゝゝふゝや妻せるくまて　北谷
ゝゝふゝゝ大みつゆて猫の恋
洪水文おやー笠やまゝふゝゝと猫北妻のまえ
もそれかりあるくさゝみ平
茶北ふよ成て妻和　休この妻
笠を後き徳あるてまて路北妻

そもく〳〵藤鞆の　根源を〳〵道天納云始皇の比在秘
訪よこ云芙蓉ゟ伐りくる蚩尤の形ことなきもの
も書り要略抑よこ云本朝〳〵渡る古文ゟを三十二代
皇極天皇の御宇なり君ゟを三十九代天智天皇
ゟ〳〵めて是を物ふたまゟを大職冠ゟ〳〵めて
ゟ〳〵むすび相ゟを拾遺納云成道卿ゟを拾遺
談セ〳〵ゟ卿相ゟを拾遺納云成道卿ゟを拾遺
能比初ゟり又云双のよこよしゟかゟ成字ゟを
史記藤比名家ゟを能ゟ井奈俄能経比親波
ゟを三ヶ条式ゟを云正月ゟを公事おなく〳〵二月朔ゟを
三十ヶ条式ゟを云正月ゟを公事おなく〳〵二月朔ゟを
三月上旬たる〳〵清明前二日ゟを百三百よ
前ゟを云く

又云是藤長の事ゟを一支或又伝能の中よ武
丈斗ゟりる人もあゟを又成道ゟをゟよ〳〵ゟ号し
ておひたゞ〳〵こゟくけよゟる藤ゟをよ〳〵て成
ゟるこゟなりくるふ〳〵きゟを云の説ゟも乃ひ
かゞし〳〵云
又道速のてゟ事ゟを述〳〵ゟしめておそく呆へ
〳〵ゟをゟをく〳〵ゟしめてゟを〳〵呆へ〳〵ゟ
ま〳〵これゟを則おそく呆ゟへきのゟをてお在
ゟを事ゟを者のかけ合ゟてやゟり事ゟ在を藤り
前へゟをゟをりゟをれ事ゟの日比附白ゟも柳よきか
けゟをゟをゟをゟを是在等比在ゟを是をふく〳〵ゟを
白微ゟをゟを説あるゟをゟり

見ゆるかぎりに枝葉の垣書むべきなり

甲斐猿橋

あらくまおふ谷やよふさふる

思考ふるのみならず古人の三ふる好物とせむつと一説に猿とも馬とも生をるが常にて用ふるよ猿まるは狙こてをけるこをむつかしく人こをろ三ふ物ふいてまるをといふるハ別猿おまて注なて

此ふ人のふをきけを芭蕉の得ありて

猿そ一や猿も笑ふるかな上

祖翁の句おそ一笑よ不審あり猿が句よ

かけそ一や猿も笑ふる笠のうち

とふいたーふに紀桜ありむ翁此句をきふ一

そつくそるかもきふ一我をきふ一

迷ふ甲桜まこのそく外一笑

是考迷おそ漏れあふ一武蔵の暁帥夫の集文かけて笠の梨花地まる候まて白とあれおとくこれゆるそのまよりてこれまた又外の方ふそのことくこれゆるをかくふとまも支体系に「吾書迷ふあまとといふおそる迷あの小けかくをてもせをすこ一かなふ一此句ハ迷ふをいふるこてをおく右調のてなれを外の笑ふ一ふあつまてもう桜のおくの事て外を迷ると無一たる事まて此名所まそ新へ一

一個人的錢財物件，被人家用計謀騙了去，或是被人家用強力搶了去，這個人的錢財物件，既被人家騙了去搶了去，這個人的錢財物件，既被人家騙了去搶了去，這個人的錢財物件，既被人家騙了去

大和国宇陀村に
永く隠住す仙客なり
有偈云山家集に「水もりに旅寝をすると
すみ山家のあけまを思ふ風又西行
桜の詞よまで思ひ入ぬ吉野も奥も
花ぞかすみける」此ハ吉野の山かけよ
詠る歌さへ此のまゝに写しとるへし
実ハ此僧を云へし
天香法印の賛
月うかと見しと四睡ハ眠りかな
天香法印ハ羽黒山の古哲のよし其人も未考
但睡を豊干禅師寒山拾得虎谿三笑四睡之

法師ニ公一つまを略ス
布袋若葵
もみ洗ひやふくろの中も月と
有儒云高丸先庚々英集指月布袋歌
大千をたゝ一たる袋かな
秋もさらす
愚考布袋和尚ハ仙行派白形枝服膝髪頬皺
腹以杖荷二布袋一供身之具ヲ駄二嚢中一ハ市見物
輒ヲ或醢醢魚俎俗様入ル口分少許一投二嚢中一白鹿
和尚問曰如何是布袋師便放下布袋又問如何是布
袋下事師負之而去ル和尚者弥勒化身也深負
明三年四明岳林寺廊坐二盤石上一化ス

う是等の人を召して古楽并に新楽共に奏せしめ侍三回用ゐ給ふ也と云ふ事見えたり
もみぢの堰を詠ませ給ふ
秋比重なりて
まとゐ
あそび
宗澄寺武貞徳ハ此歌の天主を
うけ給て心底を万葉と侍ふ共
よみ給ふむねの御事をおぶ
さゝ草
月
是等ハ万葉のあそび達
是考柚日記と等句を三聖人の聖とし給ふ

ゝ給ひし時安倍三聖人と対して月見
あそび達とゝふ事を自分をもて論ずる
ハおこがましけれども三聖人の聖ゝ并酒の友と
ゝ給ふ月比味ひ知りたまへかしもおよ
ばぬをおよばぬかしおしたかなひもしらで月見れ
ゝ達ゝ給ふ柚の記ゝ儒仏老と対して
論ゝうゝ引ものあしむやあゝ柚日記とゝふ書
ハおこがましくゝ杜撰おゝくして用ゆるに
宗澄ゝ志那弥三郎とゝつゝ能書にて一流を記
し給ふ宗古のゝゝ山崎と跡迹にて世の賢笑
ふ所なる仁人をもて給ひ元祖とし給ふ事の如
杜家の白下に来りく学ゝ

宇武天仲勢山田北長官にて宗鑑と云右のこと
名世の翁と宗鑑と犬筑波宇武と千句あり
貞徳ハ松永弾正三年秋八月近衛龍山公ノ条
玖山公より細川玄旨法印ハ伝授ノ為
等よ俳諧一道の宗匠免許ありて俳諧
北武田ノ御傘と称ス則俳式根元の
称一て宗祇ノ意旨を則雪吟の門人
て若狭ノ酒守ニより称誠宏ノ意ニ
是一流の祖師と成玉へりむ尽ることを

此ノ発句雑躰也く強ニへる
思考ニを春句と心得て句集ニ出一ニる
注釈を加ふるの誤ひ大きニ非ニより
是ハ信徳七百廿歳の次歳にて八百歳目の
三の春の句く既ニ七百子十貞の誤ニを
二ウ 挨拶をニて仕くしかさ(ママ)ニてのまし(ママ)ある事ニく
三ヲ 発の句ニ雑躰也く強ニへる
(這句ニハ荘子ノ可見矣
祥瑞のかたちまでに
桃青 其角 才麿
祥瑞ニを称句ニ見ニ附句の説授ニ
祥瑞ニを称句ニ附句の説授ニ

酒呑丹青人の画よ
月花もさくて酒のむ獨う哉
芭蕉庵も火の気なく秋の暮
初冬人の許より春を知らるる
新の梅よ雪のうかるるを見るく
泉川の松をさくらむ春の梅
なふくて松をつれふかるるむの使うや
泉川の春のまちまち梅まくら
此句癸の初こちよりえこ
幽一まむや墨子芥焼をえてもれ
丁癸云蒙来曰淮南子曰楊子見逵路而哭之為
其可以南可以北墨子見練絲而泣之為其可以

黄可以黒此俤をよくうつと見へさうも
無青杜律よ盤剥白鴉谷口栗飯煮青泥坊底
芥一汽よ白鴉谷口栗飯煮青泥坊底
坊ら縣南よりかの称つ系の英よ深更
墨よ深くむてすを折なけく其色をつて
芥の領ら色も出のくかるるもなるも
芥焼よりてら紫のまきも根のふきも
けの玉きに煮深くれて倶よ入かるとき
めつちやまるむてるをかるむとるの白の
ようみら出一まもわ墨子。く初く人の芥
焼するぬえてもれと二切よ冷せすむも
自然のわうちの如くぬ七よ冷するはを

墨子ら自ら苦繞まるるを他より聞くも
やうにやゆまる
なくや名もなき草なるまる塚

相國寺まる

営まる感ある外れをやーれ

五山相国寺まる祥宗五山の主二まるさく宇基ハ
義宣開山二世玄菟定利義満公より建立まる
寺領千六百六十石まるまるハ應永元年ヒ
焼亡より天文二十年秋三好長慶放火まる
四度まるまる塔頭普光院の竹林より宝泉卿の差
なつて出宝泉ハ比叡山を焼ける時ハ
さりを建仁まる大法まるなつたる承兌ハ社

世や人や云まるもさ智三十里まる

三國語ハ曰楊脩字徳祖魏相曹操主簿至江南
読書十人行皆有八字黄絹幼婦外孫虀臼操
不解問脩脩曰卿知否脩曰知之操曰且勿言待
吾思之行三十里乃得之令脩解脩曰黄絹
色絲色絲絶字。幼婦少女妙字。外孫孫
女子女子好字。虀臼受辛辞字。操曰
一如二脩意俗云智無智按三十里ハ
其實三十里まる此古事をふもれまる句の云
ハ彼臭室老人吉野まるくの若もまるくハ
といひ捨まるくまる今ハ名句を好まるまたまる
吉野まるくかの二十里ハ京都の北里まる

陽於みちもとゝ永谷盛山もとゝ北朝臣
此一句もとゝむつきさゝ月夏室を楊脩ゝ智よ
比一菁操ゝ三十里比安智を花ともゝ智と
比一時祖翁比身をおとゝむるゝ酒為ゝ
玄奥あゝもとゝ絶妙好辞の言ゝ永今ゝ言ゝる
か彩妙ゝもとゝ松花さゝゝ山もとゝ比の句よ
向ひくは先とゝ為ゝ今ゝもとゝ幸をあふくへ

春雨竹窓よおとゝゝ小いと宋もとゝ日容あゝり
賓主坐さゝまゝもとゝくゝ云て云
林咲やちやゝゝゝふてやゝ雪本妻

此句の句を名小ゝゝや平もとゝ比此句芝ゝ比ゝる
もとゝもとゝあゝとゝよ一又ゝもとゝくゝゝもとゝ句比ゝもを
知小ゝる人よもあゝとゝと義をゝゝうとゝこをぬ
うちゝくゝ宮あゝり平ゝ云て云俗統平あゝれ
俳諧よあゝもとゝ比のるゝをもとゝてやゝも
ちやゝうてやゝふてやゝうゝもとゝもちやゝくゝと云
義ゝもとゝもちやゝむぷゝむともいひずゝみもれ
なゝみもれといゝゝよおゝゝ一詞ゝくゝ佐名よ
てゝも不ゝふよゝふ詞ゝもゝゝうゝ
雪業ゝゝふ宮なるふ佐源宝も順徳帝
をは一先ゝり為兼ゝなゝた迂あゝて八
源大系比詞今よ俳小ゝとゝくゝゝとゝ林咲

てまの松風やうなるにつけて墨水奥州をもちろを言入たら地と社
佐州をもちの行ふ事ハそのうちをすべて京法にてかーもありまてをれふ
高きの作方くの余光ハ
さてかの織物仕掛の人くのめ〻思ー
めすもやまそー
残考仲賀の山中うニのる本中紙少又高
ふまてうニ居ふ又木うニ竹うニ石うニ等れ
報荷あり本名石炭ニ仕依能長のハケふる
あつて吳名さ通ぐ子う万物吳名鎗ニ乗ハ
出すえ今すへー

（8）日八監長話を珍喜ふ
芦ハ考訂の勾解参考えるて
芸蒸め家てへ入まろ〳〵は
就支子のてもハ勾淵のなか
にて餘音さ抜ハ参考中ま
えハ勾ふ不中勾ふもこの変を
神綴ふめふふ本ハいまを佐変

去る冬 委て往十明之龍
帰克達といへる下ゝ言
同僻我去るよりの心ちせ十入ゟ
後こ而立ありて中秋之
桜月廿日　山峰
月院社老人

追加　山峰よりおくる漏脱の句
　　白川の松をかそくむ子代の美
山峯云白川の松をかそくむと子代乃
ゝめ〳〵を雅中ふいひおくまゝ清ゝ
云味の中庸なるもの或人のおゝ
〳〵寛永の清水ゟ勿体なくも
時軍家御馬を進めさせられ今ゟ名亜橋
の通ゟ御覧あるゟ清水流水流〳〵として
長天ちをゆく〳〵云
御同ふさくまるものと
てゝ本母寺ゟ神白川五本の松のみ
五本松ゝゝ所個別帳の矣天ゟ松ゟ同
の松釜屋堀の松松本稲荷乃松等ゟ見

の松なり此外古一面の水ま[illegible]
思考家ケ谷より松とそいふ[illegible]
今の八幡宮を寛文[illegible]中の遷宮[illegible]
といふを砂村より[illegible]
[illegible]
三有云[illegible]
原川大橋猿江小名木川の[illegible]
久世侯の下屋敷内小[illegible]
[illegible]
[illegible]

對て白作りするまゝ極れり狂下考
万葉のひとり詠るや萬月夜
をゑ出合かしらや系の梅
旅人の梅そうゑむ梅ふ
柳ふかさそよや梅乃都人
恵考梅の都人とゝ船波の陰しつゝ
てかの小万柳なとゝゑよりふとゝゑゝ
歸京する君ゑ考る押れ
矢剣切
吉川よ鯉も目を張る柳くな
白魚やゑよさそうは消ぬへく
隣なる家波う旅よ誘き

るを
古巣しゝあハれ發へき隣う那
麻福田う袴よそゑよや去筆
恵考柳亭不拘万治年中作者志ゝ作
百員点ゑ二十評
○かりそめに吹気まそなる恵風よ
○人ゝそおよひ得る麻福本
立圃 重賞 梅盛 季吟 宗陸 元隣
任口 玄札 空存 道寸 彭也 長治
竹犬 胤及 右十把評 知光
西武 知光の手う 負宝 麻福本分ゑ手
令徳 等元 麻福本いゝ
西翁 麻福本

赤澤 麻福太不留 遊名 正友 下の二字よみ

○消ゆるも殘るもぬるゝと書あけてかゝげてありて京大坂江戸伏見の歴々も知られぬ麻福太退考

東風よ吹おこせよ梅の香

初瀬まで人々尋ねくるゝ

うかりける人やまつせの山櫻

山家をたゞしかれとその古意を發して

吹風よ尾細うなるや犬櫻

思考犬櫻を一名赤天一名上溝ともいふ

後朝の心をよみて廢さるゝ犬櫻

退きなされてひとりなき家信濃

ておもひ沈みぬ

なくなる鉢をかそ

まなくくといふ

その俚言を

犬尾尾よ

さゝしてのいのうみと

されえたの

櫻のもの乃

咲る歌うら

細まて犬の

御大町 書籍之印

尾のとくなれを火桶とせくなへ
破ふや桶をゆする波の音

紀三井寺

尾上なれを桶志ますて紀三井寺
添川やふくふかふくまよふくそうむおを桶もる

法師の幕

画よ

いさ家玄昭素の挨拶せむ
愚考心中よろこ迎拾得の伊勢へ
慇懃よなりでいろくる菱の花
君をよ我をよ荘子よ夢ちう